平成26年3月10日発行　毎月1回10日発行　第67巻第3号

日本消防

●全国消防大会
第66回日本消防協会定例表彰式
「消防団と地域防災力」シンポジウム

消防団120年

3
2014

日本消防　CONTENTS

2014 3
Vol.67 No.3

口　絵　全国消防大会　第66回日本消防協会定例表彰式
「消防団と地域防災力」シンポジウム　H26.2.28（金）　ニッショーホール
日本消防協会理事会・代議員会を開催　H26.2.28（金）　日本消防会館

巻頭言「遠い記憶が蘇る。」－教え、そして伝えることの大切さ－
……（公財）徳島県消防協会　会長　中川　正……1
日消の動き「日消の平成26年度」……㈶日本消防協会　会長　秋本　敏文……3
全国消防大会　第66回日本消防協会定例表彰式　「消防団と地域防災力」シンポジウム
……㈶日本消防協会……4
㈶日本消防協会及び全日本消防人共済会の役員会議の開催……㈶日本消防協会……19
第13回消防団幹部候補中央特別研修結果について……㈶日本消防協会……22
東西南北（東京）「千代田区は私たちが守ります」……神田消防団　団長　中田　禎一……24
東西南北（青森）「一丸となって」……おいらせ町消防団　団長　丁塚　俊夫……26
東西南北（大分）「『予防』それが一番大事」……日出町消防団　団長　中村　健治……28
シンフォニー（滋賀県）「女性の絆で防火防災！」
……守山市消防団　守山サンレディース分団　分団長　藤本　和子……30
災害活動報告「台風18号に伴う竜巻災害活動について」……熊谷市消防団　団長　關根　誠一……32
災害活動報告「台風18号『気象庁運用初の「大雨特別警報」発令』」
……小浜消防団　団長　竹中　嘉浩……34
都道府県消防協会事務局長会議の開催と第24回全国消防操法大会出場順抽選会を実施
……㈶日本消防協会……37
少年消防クラブ指導者交流会を開催……少年消防クラブ活性化推進会議……38
少年消防クラブ活動に参加しませんか……総務省　消防庁　防災課……40
頑張れ！少年消防クラブ（愛知県）「職場体験を通じて学んだこと」
……瀬戸市少年消防クラブ連絡協議会……41
うちの名物団員……42
消防団の広場（石川県）「活動発表会に出場することも消防団活動の一つ」
……金沢市第三消防団安原分団　団員　濱田　勇樹……44

編集後記

表紙写真説明

「日本橋」

東京都いえば江戸、江戸といえば日本橋。完成は1603年（慶長８年）といわれ、五街道（東海道・甲州街道・奥州街道・日光街道・中山道）の起点としても歴史ある橋です。

また、この地には魚河岸がありその昔から賑わいのある地でしたが、関東大震災後に築地に移り中央卸売市場となりました。

全国消防大会

第66回日本消防協会定例表彰式
「消防団と地域防災力」シンポジウム

平成26年２月28日（金）　　ニッショーホール

日本消防協会理事会・代議員会を開催

平成26年２月28日（金）　　日本消防会館

巻頭言

「遠い記憶が蘇る。」
ー教え、そして伝えることの大切さー

(公財)徳島県消防協会　会長　中川　正

私の育ったところは徳島県南部の阿南市という、紀伊水道から太平洋に連なる沿岸地域で、農業、漁業を中心として古くから栄えた県南部の中心市です。近年では県内唯一の石油コンビナート地区の指定や、石炭火力発電所の操業など工業化の波に乗り、新たな光源として急速な普及が見られるLED（発光ダイオード）の開発生産で有名な企業も立地します。幼い頃から海山に親しみ、海の幸、山の幸の恩恵を受けながら育ちました。当時は今と違って、透き通るような海で泳ぎ、釣りや貝採りの獲物は、いつも母に調理してもらい、夕食の卓に、もう一品と添えられたものです。

あれは昭和35年５月、私が小学校３年生のある日、遥か地球の裏側、南米チリで発生した地震による津波が、丸一日かけて日本列島に到達した日のことです。友人たちとの遊び場の一つである港の光景の異様さは、今も鮮明に記憶に残っています。当時の気象情報は、現在のように充実していないため、それほど大騒ぎにならなかったように記憶していますが、チリから太平洋を越えて津波が来るらしいということで学校は休みになり、両親から海へ近づくことを強く止められていたにもかかわらず、今にして思えば、少年時代の旺盛な好奇心、探究心は抑えきれず、実家の裏にある港の岸壁へ行ってしまいました。果たして港は、普段とまるで様相が違って、遥か沖合まで潮が引き、NHK朝の連ドラ「あまちゃん」のごとく、小学生の自分たちにとって、思い切り肺に空気を満たし、水を蹴っても潜れないところにあった岩が、目の前に完全に露出し、陸続きになっているのです。それは胸躍る光景でした。親からの注意など吹き飛んで、貝や魚を探しました。普段目にすることの無い、そして小学生の体力と技術ではとても到達できない海面下「３メートル」の未知の世界に高揚していたのです。そして何分か後、異変を感じて振り向くと港の口から一気に波が押し寄せて来て恐怖の底へと引きずり込まれたのです。幸いすぐさま岸壁をよじ登り、膝下まで海水に濡れただけで事なきを得たのですが、一歩間違えば大惨事となっていたことでしょう。父母はもちろん、周りの人々に大目玉をもらいましたが、自分にとって昔の「遠い記憶」の一つです。それ以降も日本各地では地震が、津波がと頻発し、その前兆現象の一つである引き波で海が干上がるということが何度も観測され、私が小学生の時に「やってしまった」ことが繰り返され、海に近づき波にさらわれるという事故が多発しました。先の東日本大震災の時にも、津波の恐ろしさを日本で、いや世界で

一番知る三陸の方たちをしてもやはり、過信や過小評価、あるいは興味本位や無関心等により、自ら海を見に行き被害に遭われたという話も少なくないと聞きます。この地震国で何回も繰り返される悲劇を無くするには、私のように一度経験した者ならともかく、総ての人々が小さい時から、地震・津波に関する防災教育を受け、確たる知識を持つことによって「推測に頼る行動」(「大丈夫だろう」「これ位なら心配ないだろう」＝最も危うい行動）を制御し、本能としての探究心や興味による危険な行為等を排除することで、地震・津波に限らず、ひとたび災害が起きれば、誰に強制されることなく安全な場所を目指すという行動（防災の行動）をとることができれば、日本人は世界中から、各産業分野における技術力や、国民性としての公衆道徳、互助の精神、団結力、美意識等々で高い評価を得ていることは勿論のこと、世界一安全意識の高い国民として胸を張れるでしょう。

全国で不況、不景気の大合唱と、それに伴うように経済の活性化が叫ばれて久しく、効率や経済性ばかりを優先して、安全は二の次、三の次になりがちですが、徳島県下の消防団員は、豊かな自然と温かい人々の暮らしを第一に考えて、地道な消防団活動を行っております。熱心な会員諸氏のおかげで、㈶徳島県消防協会は一枚岩の結束をもって、近い将来必ず起きるとされる南海トラフ地震への対策を進めている所です。特に高知県から徳島県南部にかけては、経験したことの無い強い揺れと巨大津波の襲来が予想され、東海地域から東南海の近畿南部、さらには首都直下型地震等に並ぶ緊急性を有しており、まさに沿岸域にある消防団、消防本部の宿命として、住民の命に直結した課題が山積しているところですが、今後とも関係機関と連携しながら、一歩ずつ確実に対策を進めていく所存でございますので、関係各位のこれまで以上のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

日消の動き

日消の平成26年度

㈶日本消防協会　会長　秋本　敏文

２月28日の役員会で、平成26年度の日消の事業計画、予算等が決定しました。東日本大震災で日消の事業も大きな影響を受けましたが、３年を経て、平成26年度は、概ねそれ以前の状況に戻すことができました。これが全体的な特徴です。福祉共済事業の支払準備金は、平成22年度の水準に戻りました。車両交付事業も22年度並みの台数で実施できるようになりました。消防育英会の奨学基金は、皆さんのご協力により、目標達成の目途がついてきました。

その中で、４月から公益財団法人としてスタートしますので、予算の組み方の変更や各種規程の整備もしています。

事業としては、前年度の消防団120年等記念大会のような特別に大きなものはありませんが、この東京ドーム大会での消防未来宣言や消防団に特に関わりが大きい新しい法律の成立を受けて将来への発展をめざすいろいろなことをしなければなりません。

８月29日に東京国際フォーラムで医療、福祉、教育などいろいろな活動をしておられる皆さんに集まって頂く「消防団を中核とした地域防災力充実強化大会」を開催します。何しろ全く初めての全国大会ですから、大変です。また、これにつながる消防団分団長クラスを中心とする実務的な検討会も開催します。

実質的にはこのことに関連するのですが、８月上旬、少年消防クラブの初めての全国交流会を徳島県で開催したり、これも初めての女性消防団国際会議を９月に開催します。平成19年度以来交付しています消防団多機能車は、防災指導兼災害活動車という新しい多機能車に変えて交付します。

定例的な事業も内容の充実に努めながら実施します。表彰、いろいろな研修もあります。全国消防操法大会は、11月に東京都で開催しますが、激励交流会などを含めて、消防団の全国イベントとしてさらに定着させたいと思います。女性消防団員の全国大会は、今年は千葉県です。今年も楽しみですね。

こうしたイベントのほか、個人年金や生協方式の火災保険も地道な事業として大事です。ここ数年、事業内容の充実や加入方法の多様化などを進めていますが、消防団員の皆さんの暮らしに直結するものとして、一層の加入拡大をめざします。

海外調査も、今年の団長さん方の調査はアメリカですが、魅力的な日程を組むなど、有意義で楽しいものにします。

このほか、日消会館の運営や日消グッズの販売、海外への車両援助、日消ホームページの運営などいろいろありますが、これ以上はスペースがなくて書けません。本当にいろいろありますが、これらは全て、全国の皆さんのご協力がなければうまくいきません

26年度もよろしくお願いします。

全国消防大会
第66回日本消防協会定例表彰式
「消防団と地域防災力」シンポジウム

㈶日本消防協会

平成26年２月28日（金）日本消防会館ニッショーホールにて、全国消防大会（第66回日本消防協会定例表彰式・「消防団と地域防災力」シンポジウム）を挙行しました。

第１部の表彰式には、大石利雄消防庁長官、大江秀敏全国消防長会会長をはじめとする来賓の方々を含む約600名の方々がご出席されました。式は、秋田副会長の開式の辞で始まり、国歌斉唱、消防殉職者への黙祷、日本消防協会会長の式辞と進み、特別表彰「まとい」、特別功労章が各受章団（員）受章者に秋本会長から表彰状等が授与され、表彰旗以下の表彰については、各代表者に授与されました。

会長式辞

総務大臣祝辞（代読 大石利雄消防庁長官）

特別表彰「まとい」 10団

特別功労章　10名

優良消防団（表彰旗）42団

優良消防団（竿頭綬）91団

功績章　963名

精績章　2,283名

勤続章　7,012名

優良婦人消防隊（表彰旗）12隊

優良婦人消防隊員（功績章）18名

都道府県消防協会等役職員
永年勤続者表彰　10名

第２部では、「消防団を中核とした地域防災力の充実強化に関する法律」の制定を受け、この法律の趣旨の実現を進めるため、「消防団と地域防災力」をテーマとするシンポジウムを開催しました。

シンポジウムでは、古屋防災担当大臣にご挨拶を頂き、兵庫県立大学防災教育センター長である室﨑益輝氏の基調講演、有識者によるパネルディスカッションを行いました。

古屋防災担当大臣

基調講演　「消防団と地域防災力」
講　　師　兵庫県立大学防災教育センター長
室﨑　益輝　氏

パネリスト

写真左から
コーディネーター　秋本敏文
総務省消防庁国民保護・防災部長　室田哲男　氏
NHK解説主幹　山崎　登　氏
静岡県市長会会長・袋井市長　原田英之　氏
岩手県婦人消防連絡協議会会長　千葉とき子　氏
兵庫県消防協会会長　岸谷義雄　氏
兵庫県立大学防災教育センター長　室崎益輝　氏

質問する参加者

第66回　日本消防協会定例表彰者名簿

特別表彰（まとい）　10団

都道府県名	消防団名
青森県	十和田市消防団
秋田県	大仙市消防団
福島県	須賀川市消防団
東京都	渋谷消防団
静岡県	御殿場市消防団
滋賀県	野洲市消防団
島根県	益田市消防団
愛媛県	新居浜市消防団
宮崎県	日之影町消防団
鹿児島県	長島町消防団

特別功労章受章者　10名

都道府県名	役職名	氏名
青森県	青森県消防協会会長 蓬田村消防団団長	木戸鐵雄
山形県	山形県消防協会元副会長 舟形町消防団団長	加藤憲彦
埼玉県	埼玉県消防協会会長 所沢市消防団団長	関根一彌
群馬県	群馬県消防協会副会長 太田市消防団団長	上村勝利
長野県	長野県消防協会会長 長野市消防団団長	羽藤公夫
奈良県	奈良県消防協会会長 御所市消防団団長	西口茂敏
滋賀県	滋賀県消防協会会長	植田和生
鳥取県	鳥取県消防協会元会長 琴浦町消防団団長	門脇正人
高知県	高知県消防協会副会長 室戸市消防団団長	太田博久
宮崎県	宮崎県消防協会会長 宮崎市消防団団長	尾中代傳

優良消防団（表彰旗）　42団

都道府県名	消防団名
北海道	羊蹄山ろく消防組合京極消防団
〃	南空知消防組合由仁消防団
〃	南空知消防組合長沼消防団
青森	藤崎町消防団
岩手	岩手町消防団
宮城	大衡村消防団
秋田	由利本荘市消防団
山形	山形市消防団
福島	二本松市消防団
新潟	佐渡市消防団
東京	向島消防団
神奈川	厚木市消防団
埼玉	伊奈消防団
群馬	東吾妻町消防団
千葉	浦安市消防団
茨城	龍ケ崎市消防団
栃木	那須町消防団
山梨	韮崎市消防団
長野	岡谷市消防団
福井	南越消防組合南越前消防団
石川	津幡町消防団
愛知	名古屋市篠原消防団
〃	岡崎市岡崎消防団
岐阜	岐阜市北消防団
大阪	藤井寺市消防団
兵庫	福崎町消防団
奈良	上牧町消防団
滋賀	愛荘町消防団
和歌山	九度山町消防団
鳥取	琴浦町消防団
島根	江津市消防団
広島	世羅町消防団
徳島	板野町消防団
香川	三木町消防団
愛媛	八幡浜市消防団
高知	南国市消防団
長崎	長崎市消防団
福岡	北九州市八幡東消防団
佐賀	有田町消防団
熊本	玉東町消防団
宮崎	綾町消防団
鹿児島	錦江町消防団

優良消防団（竿頭綬）　91団

都道府県名	消防団名
北海道	南十勝消防事務組合大樹消防団
〃	南十勝消防事務組合更別消防団
岩手	宮古市消防団
〃	花巻市消防団
〃	山田町消防団
宮城	気仙沼市消防団
〃	名取市消防団
〃	仙台市宮城野消防団
秋田	五城目町消防団
〃	美郷町消防団
〃	横手市山内消防団
山形	大江町消防団
〃	舟形町消防団
〃	真室川町消防団
福島	本宮市消防団
〃	会津美里町消防団
〃	南会津町消防団
新潟	阿賀野市消防団
〃	糸魚川市消防団
〃	妙高市消防団
東京	日本橋消防団
〃	福生市消防団
〃	神津島村消防団
神奈川	横浜市南消防団
〃	川崎市臨港消防団
〃	二宮町消防団
埼玉	行田市消防団
〃	越谷市消防団
〃	桶川市消防団
群馬	みどり市消防団
〃	嬬恋消防団
茨城	ひたちなか市消防団
〃	筑西市消防団
〃	河内町消防団
栃木	那須烏山市消防団
〃	高根沢町消防団
〃	益子町消防団
山梨	北杜市消防団
〃	笛吹市消防団
〃	丹波山村消防団
長野	南相木村消防団
〃	小谷村消防団
〃	大鹿村消防団
石川	能美市消防団
〃	珠洲市消防団
富山	上市町消防団
〃	高岡市消防団
三重	紀北町消防団
愛知	名古屋市小碓消防団
〃	名古屋市苗代消防団
岐阜	大垣市大垣消防団
〃	養老町消防団
〃	飛騨市消防団
京都	京都市上京消防団
〃	京都市左京消防団
大阪	茨木市消防団
〃	泉南市消防団
兵庫	赤穂市消防団
〃	三木市消防団
〃	播磨町消防団
奈良	桜井市消防団
〃	五條市消防団
滋賀	長浜市消防団
〃	日野町消防団
和歌山	湯浅町消防団
〃	北山村消防団
島根	浜田市消防団
〃	川本町消防団
徳島	徳島市消防団
〃	佐那河内村消防団
香川	さぬき市消防団
〃	土庄町消防団
愛媛	西条市消防団
〃	伊予市消防団
〃	内子町消防団
高知	三原村消防団
〃	東洋町消防団
長崎	佐世保市消防団
〃	平戸市消防団
〃	南島原市消防団
福岡	大野城市消防団
〃	大木町消防団
〃	小竹町消防団
佐賀	伊万里市消防団
〃	武雄市消防団
〃	基山町消防団
宮崎	高鍋町消防団
〃	串間市消防団
〃	美郷町消防団
鹿児島	南大隅町消防団
〃	奄美市消防団

北海道

大坂晴義
奥山英紀
前田登志和
佐々木明
佐藤幸信雄
須藤任清志
能小林敏夫
丹羽隆
氏家忠幸
高野俊和
遠藤利之
佐々木勝宏
吉成茂明
青山光司
若宮榮一
中世古淑昭
岩佐庚一
森川英志
板木圭司
兼松良信
西山修次
小黒次泰
伊藤昭弘
佐藤博志
田村勉
加藤武雄
中松和雄
瀧川永継男
宮井忠司
吉田忠士
高橋隆
足立勝志
斎藤守司
熊本志津子
渡邊寛子
あや子

青森

丁塚俊夫
大髙聖功
菊池正紀
畠山賢悦
相馬孝一
佐々木喜代治
近藤克彦
浅瀬石潤悦
和田裕行
小舘錬市
中濵輝男
百沢俊昭
大舘恒夫
森林春夫
吹越三男
片川春樹
赤平利昭
笹谷幾夫
菊池清悟
川崎由希子

岩手

舘澤茂
出雲民臣
佐々木啓一
鎌田幸也
千葉正明
菊池一人
湊幸雄
稲田正義
千葉忠
菅野辰巳
渡邊克己
濱淺秀松
高橋千信
小野寺勝誠
小原謙喜
川原武文
谷村伸一
高橋竹男
小原恭一
外舘文雄
中嶋義明
弐村正勝
中山下しげ子
菊池

宮城

八巻正之
志賀寧
大友秀也
今野信一
柴田祐一
長田正弘
佐藤良彦
五十嵐敏夫
齋藤幸一
伊藤新治
高橋悦朗
横山茂
相澤敏男
横地幸勝
菅原一之
伊藤久雄
佐々木金三
及川蕃
齋藤富嗣
亀山幸一
澁谷侑也
横山久一
白鳥和男
阿部はつ江

秋田

澤田勤
成田健直
渡部明
奥村牧子
金子忠夫
佐々木光夫
鈴木清
遠間富和
菅原茂
竹内勇三
石綿喜代隆
佐々木勝美
佐藤芳男
佐々木久悦
高橋英喜
大類良一
大山晴美
平良木保
佐藤忠藏
佐藤孝吉

山形

梶熊聡
岸政弘
横山里
菅井康博
花輪晃彦
瀬野正之
大泉敬夫
井上和巳
阿部淳
三上務
二戸孝芳
加藤貴
大山篤
鈴木英行
遠藤長之
渡部亨
山口誠一
山口利行
渡曾健
五十嵐甚一
富樫久弥
大滝勝
志田克也
土田治夫
茂木忠志
荒木多美夫
赤谷義勝

福島

二階堂常義
安齋忠作
児玉隆一
高木正廣
鈴木耕治
安田泰良
菅澤傳治
渡辺明弘
菅野功一
田牧浩
和泉芳雄
佐藤重実
渡辺與浩
渡邉清子
関根栄治
鈴木新一
信彦
悦雄
利夫
吹功
田充
小澤一
皆川公
平岡孝一郎
佐藤新一
齋藤茂
五ノ井義一
阿部歳一
星清美
渡部建彦
国井康浩
小倉敏夫
吉田慎一郎
石田一実
山内茂樹
猪狩丈
伏見順栄
草野正男

新潟

佐藤一洋
石井義文
髙橋潤一
中條義秋
小竹敏明
佐藤勇
齋藤利通
鈴木照生
飯倉幸一
真島武夫
張戸克彦
伊藤充
佐藤昭
伊藤稔明
宮村晴久
池田英明
米田武一
加藤孝士
板屋一幸
椛沢一彦
富井正志
関弘文
千喜良修一
藤木博
大見慶介
瀧澤一夫
小林信茂
玉田光
伊藤功
池田良治
脇川義人
長藤豊
井澤宏
内田光芳
山川茂
伊藤司
古家彦
村川辰雄
小林恵子

東京

木ノ島希久子
小西誠二
濱野洋介
小林美良子
渡辺治雄
木所政信
飯田三郎
山口廣子
石井成幸
五井博
澁谷重正
神原三千代
石手啓夫
中村靖弘
田中繁夫
川田喜明
田澤茂
生田目光男
清水康信
佐伯渡
山崎明
野村基之
長谷川秀樹
高木伸雄
新田洋行
平本健二
鈴木光孝
高橋聡次

神奈川

生坂征一
土方泰司
平井保男
秋本清道
門倉敏夫
加藤重治
田中賢一
瀬戸均
鈴木敦
沼田慎一
大川保明
栗原宏臣
興津恒夫
小池將夫
永島潔
笈川茂
森田喜八郎
金子保雄
藤田吟子

埼玉

小島清人
高橋光晴
山岸敏秀
中村英昭
伊藤隆弘
白岩芳洋
岩田善道
峰岸登一
高野英男
大舘誠
山口実
兼杉介
谷島享二
針替榮浩
鈴木克典
小貝健三
大泉隆司
安田稔夫
増田伯夫
山崎修一
及川良徳
南波律子

群馬

清水伸之
鳥山貴
家中菊治
竹内信一
大熊利夫
萩原政敏
須藤欣司
田子英樹
林政彦
櫻井浩
黒崎亮一
小川直則
萩原久雄
齋藤今朝雄
折茂綾子

千葉

星野力藏
都築富和
山本涉
土屋茂巳
榎本道雄
染谷賢一
木村寿
佐久間一
洞毛敏
石井克和
岩崎伸行
小川茂幸
藤崎展彦
宮本和浩
颯佐直也
寒郡舜一
高木茂
日下伸一
島田恵章
野口英夫
高谷信男
北田兼久
並木道夫
小幡秀夫
武田良夫
池澤孝夫

鶴岡　弘
高梨　一康
青木　昭弘
君塚　弘和
細野　暢
柳井　明良
島本　昌章
井崎　美鈴

茨城

青木　英明
宮田　務
内田　信一
小川　好市郎
川崎　弘一
鈴木　幸一
山岡　恒夫
小堀　淑守
長田　紳
稲葉　義雄
根本　将夫
豊島　博行
井上　十三夫
小盛　久男
栗原　好則
石井　一樹
髙木　信一
木村　好一
東郷　明仁
堀江　修
萩野谷　孝
田松　庄太郎
越渡　静男
伊藤　好
久下　努
千野根　保
富永　廣志

栃木

酒井　和夫
茂呂　晃男
鎌倉　健司
佐藤　俊伸
津野田　修
神山　昌弘
沼尾　幸一
廣沢　常一
大豆生田　隆
大森　哲夫
大塚　正義
大野　勝弘
斎藤　健一
鈴木　秀治
小林　浩
齋川　秀雄
幸田　昭二
重面　孝子

山梨

窪寺　文明
花輪　貞夫
安原　和民
原　匡

高橋　隆
若林　良一
秋山　由正
芦澤　孝
角田　公男
平松　秀樹
三森　一広
堀内　信人
高村　理三郎
天野　秀国
渡邊　一由
清水　洋子

長野

的埜　大介
中島　寿男
井出　大広
塩川　浩次
大島　龍太郎
井出　史亮
斉藤　章
中村　裕則
伊藤　幸徳
竹藤　英城
市川　一人
小出　俊一
宮内　久志
橋　謙治
伊藤　康弘
福澤　博俊
岡田　幸三
古坂　貴幸
田中　慎一
安藤　淳行
秋山　秀治
細田　真満
青柳　深
小林　己
清水　元勝
竹内　和之
中村　公二
丸山　修一
藤澤　道夫
鶴田　庄市
松木　慎一郎
中村　洋一
市川　石子
明石　津房
萱津

福井

中村　茂雄
越川　省吾
林　小太郎
斎藤　清一郎
堀口　格世
淺野　秀夫
一瀬　康一郎
清水　明子

石川

浦野　政行
島田　好明
西岡　門
長清　市
二社谷　崇由
川渕　啓一
田島

富山

北野　弘信
中井　明夫
坂東　昭
多賀　兼之
谷内　信行
新川　優次
簗田　敏裕
小場　満
瘧師　富士夫
新山　栄
神村　善一
佐ケ野　京子

三重

清水　一雄
水谷　典美
飯田　秀治
浦出　博美
森　貴司
辻　良久
中瀬　雅文
小河　光春
森本　貢
齋藤　進
中山　禎之
西川　容生
福田　倍典
櫻川　政子

愛知

河瀬　利夫
倉田　榮介
社本　好彦
横井　昌弘
成田　敏彦
山岸　照明
矢野　武司
三田　光義
安井　秀樹
加藤　孝男
有川　五十八
伊藤　久江
高木　政弥
村瀬　政宏
山本　浩之
猪飼　佳等
宮田　佳英
鈴木　勝宗
白井　則利
石黒　文行
中村　昌浩
猪飼　武直
坪井　敏司
上田　喜久男
竹内　卓美
鈴木　義治
佐々木　研
長谷川　正広

静岡

山本　謹吾
菊地　賢次
増島　工匠
村上　栄治
米山　恒久
久保田　光一
田村　茂
大村　友味
八木　好男
望月　勝廣
花村　直仁
青地　勇治
権田　陽夫
安田　新吾
萩原　貴宏
宮本　典寿
藤田　左門
山田　吉久
渥美　正浩
菅沼　透
小泉　秀子

岐阜

川出　一彦
江崎　武雄
水上　春雄
古田　正年
森　武司
柴山　浩司
廣瀬　真
平井　一吉
廣瀬　民昭
佐藤　浩二
橋傍　義博
長崎　正利
桐山　玉造
永瀬　正幸
宇野　紀一
矢部　聖幸
堀　祐三
植村　晃雄
加納　隆仁
原　育徳
土屋　竹浩
加藤　孝光

京都

平野　雅左夫
安久　栄二
西村　忠雄
小野　荘司
島　一嘉
奥田　俊夫
小原　昭雄
村田　弘一
中島　勲
小松　理
垣谷　克彦
飯田　政利
小國　徳人
伊藤　利明
今西　秀光
池上　幸浩
夜久　保徳
梅田　正彦
佐藤　由紀子

大阪

北野　竹次
小川　嘉治
山本　成男
枕野　茂樹
北口　誠治
村岡　次雄
久保田　勇
塩山　和也
宿久　正
加藤　ひろみ
久保　敏

兵庫

小西　元八
中西　政嗣
藤原　睦夫
新見　利夫
福島　邦昭
鎌谷　和弘
近藤　龍平
橋本　敏光
絹川　義明
西田　泰典
高橋　繁夫
金川　昌弘
清水　修
加藤　一夫
藤原　清
籠谷　健
岸本　年裕
西脇　寛
筒井　悟
高原　久人
江角　典彦
大野　浩志
小仲　良雄
岩崎　栄司
畑　啓祐
細川　知大
前川　健作
吉野　比呂志
中山　丈夫
森内　伸二
三浦　堅一
井上　正義
西田　啓治
菅野　弘三
藤本　敬之
東影　伊知郎
大谷　康弘
阪田　正人
田渕　義和
磯田　啓介

奈良

川嵜　政信
春木　成夫
中室　貞浩
寺前　高見
井上　佳輝
篠原　達司
藪田　全孝
平尾　英治
花岡　俊行
中平　えり子

滋賀

髙田　治
吉岡　新次
伊藤　克美
小山　義弘
尾板　昭一
冨田　博文
小林　元郎
中江　健祐
増田　嘉彦
平田　文治
山ノ石　江治
藤本　和子

和歌山

森本　健之
濵中　芳光
高尾　通雄
木村　剛夫
長谷川　鉄夫
家本　宏二
海野　裕清
和田　清
柴崎　孝男
亀井　利昭
土山　純廣
竹上　昌弘
園出　和広

鳥取

山田　充志
山田　悦弘
森原　美治
唐耒　明夫
北村　登志生
藤原　洋一
門脇　志のぶ

島根

板垣　祐治
福間　達也
井上　勇夫
下谷　巧
樋野　和友
常松　茂美
渡邊　美香子
松浦　英己
渡部　隆
佐々木　孝徳
渡部　世津夫

宮本裕知
森木秀朋
福山一男
坂下勲
桟敷野浩一
鶴本豊治
森田泰司

宮崎

坂元栄二郎
小田原工
川添千昭
河野忠文
川崎保人
吉行敬一郎
瀬戸山文男
谷山繁則
矢野博彦
寺原弘敏
椿原宏次
椎葉吉人
濱田正士
白石一利
安在耕二
佐藤靖則
降旗あけみ

鹿児島

松山晃
浦島茂
木之下浩
末吉義人
床次健市
髙山和則
戸島啓文
巻木茂雄
池田郁郎
大江孝之
柳田順一
福永學
井之上芳徳
松島義秋
原田直髙
宮野豊香

沖縄

比嘉茂
米須清一
安里秀己

足立みゆき

佐賀

栗原大次郎
西川国男
石丸隆義
眞崎喜隆
嘉村邦敏
原田司
富崎晃
原田邦弘
川本昌広
友田裕司
合力啓三
坂本勝行
宮崎一樹
青木和文
古賀和浩
井上正則
林博樹
吉田保雄
阿部栄
重松康清

熊本

米村邦男
福田稔
西浦健輔
森崎正勝
内田靖
石牟禮亮治
吉海一覚
楢木野政一
中島健
永田浩光
金澤清二
石原亮
増永高治
西山博之
本田覚
加藤信吾
宮原道也
池田忠清
原田清夫
冨田一
石澤修
上村重敏
宮瀬勝士
岩井幸二
水永誠治
松本博之
本田勇
古嶋孝志

福岡

赤根美也子
小川健八郎
吉田祐三
大歯邦雄
山崎博
熊谷浩文
青柳正善
藤井保広
村田隆和
井上善雄
竹下勝人
浅沼政次
三田敏和
横川清一
角正司
花田誠
松村康之
大城俊徳
中ノ森徳博
山下繁敏
渡邉英雄
矢次久
松本國廣
上田勝治
植田唯志

大分

渡邉正信
小田宏規
関正勝
隠田義明
熊谷健一
竹村盛
是永裕男
尾崎孝司
嶋田隆洋
田上文徳
髙木孝利
山城博一
岡田啓喜
河野正司
矢野千隆
上野歳里
阿部信輝
佐藤勝秀
佐口俊二
前田和義
明松円
柿川徹
山田康
吉川孝明

愛媛

久米幸一
栗原慈宣
髙橋眞次
萬條裕
戸田茂樹
藤坂信隆
井上信悟
石橋秀通
村上廣敏
宮岡直次
亀正誠
菅信一
青木信善
二宮健
大本英人
佐伯茂喜
稲葉敏彦
堀川克洋
渡邊広道
松岡長造
水本幹雄
髙橋眞由美

高知

澤田正彦
有澤光喜
田原清男
淺利隆章
爲近初男
中間正志
奥崎幸則
桒名賀博
野々宮正輝
小野政子

長崎

黒田義夫
鳥田時治
坂田操
前田繁雄
野副統一郎
眞崎典晃
田添一也
井元伸治
白石孝浩
江口栄
長嶋重廣
四辻正之
永田弘保
藤本淳次郎
片桐淳一

鎧坂茂隆
廣井英治
延満慎治郎
岡本勝美
瀬戸垣内悟
松本英治
久保光吉
林廣実
瀧口亮
新宮美惠子

山口

岡本恒雄
藤本博己
財満俊夫
山本博
山本隆
松永元就
川田賢一
長谷川義孝
山根英幸
八百屋仁
小西輝保
木村正雄
山本静
畠中巧
新升久人

徳島

蟻田明
藤井千秋
宮繁敏彦
朔重夫
杉本哲男
福浦茂
貝塚充章
宮本茂則
瀬野正明
住友寛
松家安信
宮成政信
小島鶴美

香川

十河安雄
石川光繁
矢野幹和
岩田八千代
石川孝義
神崎康光
鈴木朝則
笠井忠博
山田悟

森櫻修治
漆谷安武
板垣安信
佐々木菊保

岡山

金本栄治
島上眞弘
大川文雄
清岡秀夫
日西博資
難波右介
黒瀬辰雄
杉本要一
池田廣志
山形正文
植月祐康
石原良祐
中務昌利
岡崎明雄
冨岡己佐雄
豊福範夫
守谷澄利
井上兼男
高坂英司
神原昌昭
岡和利
片山雅明
池田守人
木山昌孝
小野安吾
坂本達幸
三原茂郎
太田樹
塩田保
山邊尚徹
三宅弘史
森本敏章子

広島

松原廣志
松田耕治
藤本克裕
宮下清次
北野隆康
木村賢治
三國了彦
溝口正明
箱田照國
三原美郎
岡本富男
谷重悟

精績章受章者

2,283名

北海道

山本隆巳
加藤孝克
稲見和彦
佐藤章典
五十嵐三
菅井英吉
山木茂
工藤健
安田勉
田中猛一
長南勝
野崎政
黒澤幸夫
瀬戸光成
中村勇二
齊藤恒一
鎌田義也
中里駿司
森富士彦
中村元勝
嶋元正宏
中川修司
織田勝洋
今井諭
丸山隆一
西藤隆造
池田孝行
木村博昭
長谷川広雄
髙士昌弘
山中工
金盛勇松
川下清
大坂樹
猪狩利春
古屋敏文
池田敏洋
有賀克幸
平田茂
塚田一夫

到涉一夫喜隆光直博雄弘潔美次男修満
正英英秀義和正一芳武
藤水田野藤藤藤内村田川上藤間城津部
佐早今佐伊遠後金木吉小井伊本結梅渡

福島

阿船田加鈴松高引佐津遠相土野増佐吉安神鈴鈴人安新木細吉関安影星小角宗遠藤鈴矢和近橋
部山島藤木川橋地藤久田野藤屋地子藤田田谷木木見瀬田村川田根藤山邦林栄典幸沢木吹知藤
正榮　良正修信秀浩一次栄英信清伊勝広仁潤弘吉昭初正武芳正真樹圭裕太郎夫　良俊秀正良
一一茂三廣治夫樹一郎男作作男昭治久明彦一信一重雄司仁浩則和覚吾雄一郎彦夫茂則幸年利示

山形

奥月横鈴武大日菅安渡大海菅森早菅土松柿高庄髙佐遊菅西柴我本大加細鈴寒村加白横安今板後本長髙阿阿
山田戸木田谷塔野孫辺江老野坂原田田崎山司山藤佐田伸妻田滝藤越木河山藤田山部井垣藤間南橋部部
敏和和純吉憲喜宏文寿進健伴敏総一郎徹一守也孝一剛一一夫啓典志一二市弘悟彦志喜貢一明忠則博一
行美昭司修彦之章栄勉和度広一一衛彦信
子
淳和忠洋隆展勝厚美謙浩義清雄良俊芳健

秋田

青木佐加伊成渡佐佐笠平石鎌高田小三佐三保山加佐高茂今横小高伊高伊
澤村藤賀藤田邊藤木井澤川田橋仲玉浦木浦坂内藤木内橋木野山田原橋藤橋藤
尚慶昭勝忠暢今康幸安寛一多公康直重隆岩千健春和弘正誠博正金
人英夫昇義男一子隆成夫信満儀人美徳夫志彦一彦秋悟雄也喜功博尚一紀夫

宮城

菅菅吉川宍小並加赤丹佐加鈴平針石鈴岸根郷鈴金菅鹿横福
原野田島戸笠澁谷藤丹藤藤木間生塚木田元崎古木木子原野山田
義清信哲克正傳信新和清勇治健泰初幸勝勝清安市政眞政
美和治哲美弘明篤悦一雄彦郎治夫勉雄俊雄治薫男一則透雄治榮廣

岩手

梅山川佐伊瀧及板佐佐小藤守高田奥阿小岩佐千菅小須佐福石佐佐
村口川藤澤川垣藤々木原屋橋子寺部巌渕藤原山藤田川野木
光久俊壽英一光久完正春信一榮和芳義文堅喜敏隆賢敏修民
一昭正雄喜巳善一壽幸日泉博徳一美夫朗橘司公久典雄司男二生

青森

小坂平柏二七船中村橋成
川本館崎木日場島工端田
學雄武龍太郎志美明登身了行勉一隆
正年千春清市徳光勝正

夫誠吉幸司生徹三博一桂廣正美夫晴孝治夫夫夫茂治夫勝幸護雄誠介
幹加髙鈴千菊齋菅細木松佐女大昆熊菊千小喜山藤岩中地及中平
清藤橋木葉池藤原川下村藤鹿沼澤地葉笠重野下森渕村蔵川村野
利久正敬昭浩一清泰幸定敏祐信俊智政優あけみ
藤橋木葉池藤原川下村藤鹿沼澤地葉原木谷木寺下森渕村蔵川村野
治雄修博政光志廣直一正博一郎雄行志光彰弘雄治昭郎廣光志一彦昌進登子
富公幸之光博仁勝久栄俊繁勝一信勝金信一良博源三秀次清元晴一
上野山佐長大松番大小山佐横藤花花我志大岩江柴工盛中小田名工吉荒杉野舘高古神立
藤内沢尾屋川内藤山田田田満村鹿木良田藤合里野部藤田谷森花坂里山花友
美厚憲夫一典幸道敦雄俊英彦夫一三俊隆裕一智助一司正男昭義也二弘樹彦博昭道弘夫夫優利一市一都子子枝
勝寛一一順克利廣和英幸和嗣幸洋正英克勇専納眞豊幸孝哲悠幸重雅勝善天悦英富士佐々杉舩成原藤湯菅結
井井渡津田野崎井藤原田田尾田永田藤田鹿坂村口内原川谷玉山田田上山村場藤谷村木本造田田井淺原城
鳥石飛中松矢山松佐相森鎌沼前谷古茂工永小大田納髙穀野吉綿児秋和沼林川館吉的佐川木佐杉成原藤菅結

福島

阿船田加鈴松高引佐津遠相土野増佐吉安神鈴鈴人安新木細吉関安影星小角宗遠藤鈴矢和近橋
部山島藤木川橋地藤久田野藤屋地子藤田田谷木木見瀬田村川田根藤山圭一郎彦
正榮　良正修信秀浩一次栄英信清伊勝広仁潤弘吉昭初正武芳正真樹
一一茂三廣治夫樹一郎男作作男昭治久明彦一信一重雄司仁浩則和覚吾雄

山形

奥月横鈴武大日菅安渡大海菅森早菅土松柿髙庄髙佐遊菅西柴我本大加細鈴寒村加白横安今板後本長髙阿阿
山田戸木田谷塔野孫辺江老野坂原田田崎山司山藤佐田伸妻田滝藤越木河山藤田山部井垣藤間南橋部部
敏和和純吉憲喜宏文寿進健伴敏総一郎徹一守也孝一剛一一夫啓典志一二市弘悟彦志喜貢一明忠則博一
行美昭司修彦之章栄勉和度広一一衛彦信
子
淳和忠洋隆展勝厚美謙浩義清雄良俊芳健

秋田

青木佐加伊成渡佐佐笠平石鎌高田小三佐三保山加佐高茂今横小高伊高伊
澤村藤賀藤田邊藤木井澤川田橋仲玉浦木浦坂内藤木内橋木野山田原橋藤橋藤
尚慶昭勝忠暢今康幸安寛一多公康直重隆岩千健春和弘正誠博正金
人英夫昇義男一子隆成夫信満儀人美徳夫志彦一彦秋悟雄也喜功博尚一紀夫

宮城

菅菅吉川宍小並加赤丹佐加鈴平針石鈴岸根郷鈴金菅鹿横福
原野田島戸笠澁谷藤丹藤藤木間生塚木田元崎古木木子原野山田
義清信哲克正傳信新和清勇治健泰初幸勝勝清安市政眞政
美和治哲美弘明篤悦一雄彦郎治夫勉雄俊雄治薫男一則透雄治榮廣

岩手

梅山川佐伊瀧及板佐佐小藤守高田奥阿小岩佐千菅小須佐福石佐佐
村口川藤澤川垣藤々木原屋橋子寺部巌渕藤原山藤田川野木
光久俊壽英一光久完正春信一榮和芳義文堅喜敏隆賢敏修民
一昭正雄喜巳善一壽幸日泉博徳一美夫朗橘司公久典雄司男二生

青森

小坂平柏二七船中村橋成
川本館崎木日場島工端田
學雄武龍太郎志美明登身了行勉一隆
正年千春清市徳光勝正

彦光徳一久吾二義利広剛之夫一栄秋平誠弘夫一一典浩二彦徳弘彦之功明美一子

群馬

櫻井藤澤田井井林里丸嶋田野根田野訪見野田里上木谷藤水島藤谷井達下水田崎
齊柳横今直小中金林小内狩関碓星諏浅塩時中撹並土佐清松後秋浅安宮清森岩
正武義隆和新浩明勝道貴孝洋直典耕富和巧敏弘雄公孝直雅博英正邦さと
隆美夫薫実春三興彦夫浩隆正晃夫治美敏久広夫貴之晃人己夫久治志夫夫明寛郎雄一也也行稔彦敏氏行次夫夫一次到義勝一夫明三司典子菜
正正一重正慎昌和康美正隆芳隆邦裕久克昭武啓厚幸一輝和一國良勝拓昌勝清孝健和茂嘉智喜秀久利恵立剛由美若
立方崎留本井木口泰茂
足土杉岡橋桜鈴山

埼玉

小谷野原口子谷賀井塚原口塚川井上山沼村田野屋塩野波原船藤木川野田上本沼嶋橋村島村井沼沢木橋口本
塩野金三浅新君荻関成小金川瀬戸田岡増菅守眞高藤吉早加原鈴宇田岡池井岡小福高野矢松白柳平黒鈴高野榎勅使河原島小中佐吉
直明博夫士也義義司勇光也彦成邦彦広茂男敬毅明司樹

千葉

小林正直
松本英明
髙橋博
落合孝夫
田久保仁士
橋本昌也
大塚三義
三原規義
藤間健司
長岡寛勇
清澤哲光
宇田川明彦
丸子和成
宇田川憲邦
志村山昌彦
待小森谷広
田村富茂
椎橋忠男
宮崎智敬
染谷正毅
林野兼明
大野香司
中野樹

東京

橋沼雄一
中澤和夫
遠藤成則
田嵜茂明
加村内雄
竹原陽治
荻野博純
中元保文
秋田富美隆
安笠弘幸
折村昌隆
中川利孝
小辺高子
渡山雅司
丸泉みよ紀
小田和男
高澤浩一
尾崎和夫
山嶋浩清
五味和矢
坂本修男
河村昭奨
島瀬美二
貝橋純治
高藤壽江
加藤美勇
加藤久美一
竹井晃
荻田つや子
金村孝司
木井内夫
若田滝男
池中治
大本明
佐野章
大石之
宮萩行
濵士次

神奈川

香取正彦
飯田崇久
飯村勇一
矢部孝一
小林美晴
三浦順治
涌井正夫
渡邊昭一
渡辺良市
奥田利一
小林満江
落合徳勉
河原新治
井上須保
那田木武美
浦橋伸一
藤藤克明
髙田さだ子
多木橋保
井田口範
関喜平
中島幸朗
鮑子哲明
榎本忠洋
山本吉徹
鈴木竜郎
黒木上明久
福田田雅美
久保田友康
秦野亮明
守屋一
浅田強
阿久津正
平野佳明
望月玉三朗
大塚一夫
瀬沼正一

弘昇治雄樹一男守司浩一樹治敏明雄奈子
幸祐幸正秀健正正精秀寛正良久香順
田部崎村嶋口田林戸岡間塚屋野本井川藤
池諏訪矢中江樋山平郷豊本赤土高塚白脇佐

一政行文人明作久幸朗信則博幸稔和敬春勉勝豊樹則則彦之夫司也浩一浩登弘樹弘雄彦人一雄一明史明幸一博夫一一源弥栄一義司児徹幸文弘行
誠勝孝博直利建浩義忠康勝敏良竹正吉義八十裕忠欽誠貴尚吉真眞孝嘉尚洋英伸正正和恵和利喜正憲一一重勝康浩正勝善
藤山林野柳木藤田川金澤伊邉橋坂部橋辺藤部藤保久藤槻石藤山口田中藤田雲藤塚原澤島口口橋橋原子野野桐竹田垣山内内保山深牧崎藤藤
近丸小吉青荒斎藤小比樺井渡髙脇阿高辻渡武渡齋彌佐若武遠柴樋志田佐椿和南遠清林上半福樋江髙高桑金駒柴片大山板内丹竹本森羽三山佐加

新潟

熊谷芳和
吉田忠
窪田秀
藤田幹
藤崎和
荻原孝
五十嵐道
岩野行
松野和
和田宏
西村進
斉藤一
田中正
阿部宏
岡島
堀川井
廣川
皆

樹一一一義一雄昇雄夫渉行弘雄明一市一一行之雄次道喜房春人美行明一博道重充一紀徳志子仁茂博幸行行雄幹夫隆雄政貴一昌武浩修晃晃
雅良貫宗貞啓則忠丈寛治和光幸三潤伸髙敏英善正宮瑞正直丈和正庄英弘良健靖重武洋富
合木川田田野地井柴部野久代川池部城内竹山井沼田井賀川原田井澤萩田戸本藤折口木島藤村野
猪舟緑束本小菊由小矢大高田芥小矢栗坂大小星室芳賀太石芳面高吉柳黒髙秋宍栃遠桑芦鈴寺齋川菅

二
英
加代子
松田
山内

石川

雄
一
秋前
昌
寺山
浅田
田島
川野
庄
中竹
八村
宮村
松木
亀下
土本
谷井
佐谷
濵山
二
薫
造
弘
茂
一
隆
雄
人
秋
守
秋
隆
子
田
麗

富山

政
石坂
酒井
山崎
水上
吉田
奥
岡田
杉田
土田
大石
高木
田口
開井
土下
山樹
柏邉
渡原
松口
谷田
廣森
吉井
澤田
久
坂
荒尾
増井
直
巌
夫
博
渉
三九三
晴
康
修
一
實
哲
三
一
郎
正
金
弘
平
勉
信
芳
吉
孝
直
俊
三
忠
茂
勝
和
智恵
市
樹
一
志
實
成
門
幸
光
治
彦
美

三重

川村
後藤
佐藤
豊田
駒田
近藤
住田
倉田
寺島
小菅
永井
野田
井上
油谷
一
昌
信
宗
誠
幸
久
正
久
和
義
子
要
義
久
守
二
宏
謙
夫
美
志
隆
実

則明
輝
学
行
直
夫
拡
幸
秀
亘
一
仁
司
光
織
文
司
崇
徹
純
男
二
樹
晃
喜
貴
昇
一
夫
晃
美
夫
文
夫
行
一
肇
男
章
弘
博
宏
紀
津
子

政秀
芳
基
明
左千
裕
潤
健
倫
博
伊
宜
忠
正
正
誠
大
政
晴
賢
哲
壽
好
信
博
秀
貴
基
敏
寛
敏
正
勝
真
志
あき

林外
小垣
漆
樋
酒
宮
宮
松
上
藤
北
柳
玉
上
武
関
宮
西
山
宮
太
小
西
波
小
小
松
下
小
小
西
山
丸
田
岡
松
竹
上
加
萱
久保
金
山
金
飯
丸
平
田
井
坂
澤
山
條
松
村
澤
井
條
田
森
入
澤
本
木
田
林
澤
多
川
島
本
條
嶋
林
澤
口
山
中
澤
本
内
野
藤
津
田
井
田
子
島
山

福井

清
大
野
市
砂
藤
朝
増
廣
仲
澤
武
鳥
大
大
水
坂
坂
村
村
田
田
日
田
田
下
田
田
居
江
西
利
俊
光
陽
昌
正
順
善
一
秀
喜
正
恒
正
彦
幸
男
洋
司
實
幸
一
見
男
雄
孝
美
信
晃

仁健
平
男
勝
和
人
夫
修
伴
一
春
彰
寛
義
幸
宏
男
美
子

道良
和
清
和
二三
正
庄
和
春
久
和
秋
一
保

長野

青
宿
新
菊
中
塚
朝
工
小
森
中
柏
小
洞
中
杳
林
宮
唐
滝
和
林
中
山
功
清
三
中
山
米
松
阿
森
塚
佐
三
山
武
末
牛
木
岩
井
池
島
倉
島
田
倉
藤
林
泉
山
木
泉
川
掛
原
澤
澤
田
島
口
力
水
澤
村
岸
山
村
部
田
木
鬼
田
儀山
松
丸
成
和
一
隆
紀
慶
近
武
武
弘
智
孝
和
秀
克
茂
明
勝
正
弘
修
喜
澄
俊
定
俊
喜
文
清
祐
伸
一
糧
新
真
正
実
光
朋
明
剛
幸
太
志
彦
二
夫
行
良
仁
一
弘
重
直
彦
幸
彦
也
男
雄
一
朗
夫
明
夫
弘
明
人
彦
二
治
誠
二
一
史
文
梓

太田
長澤
宮川
米山
飯田
望月
加々美
古屋
篠塚
佐藤
重森
長田
渡邉
石井
金澤
程原
志村
長田
福島
水口

栃木

小
上
大
羽
伏
森
大
鈴
小
渡
齋
安
高
大
坂
神
高
小
大
野
佐
塩
大
大
菅
石
福
大
高
青
中
亀
須
高
坂
杉
鈴
常
井
橋
津
善
野
野
貫
石
木
田
森
木
鍋
邉
藤
野
橋
野
本
山
村
林
藤
澤
藤
澤
橋
貫
又
塚
田
平
久
木
田
田
永
槝
本
原
木
盤
上
壁
井
久
芳
剛
信
順
秀
健
孝
兼
享
功
雄
修
隆
和
英
紀
正
初
正
一
利
広
和
恭
哲
文
英
由
光
法
智
裕
忠
光
祥
泰
貫

山梨

保
戸
日
雨
金
中
森
熊
深
安
篠
井
前
原
丹
深
佐
坂
澤
向
宮
丸
澤
本
谷
澤
藤
原
出
島
澤
澤
野
肇
光
康
健
聖
博
章
克
一
治
堅
忠
悦
男
功
久
彦
一
治
学
文
雅
巳
司
文
志
行
渡
夫

敬
行
一
文
弘
一
夫
雄
一
志
一
介
一
一
一
浩
興
男
夫
実
一
伸
弘
行
博
則
行
光
広
一
也
夫
雄
尚
男
洋
雄
典
之
義
彦
子
之
一
也
也
男
平
一
秀
彦
彦
浩
行
行
博
男
稔
実
一
彦
彦
雄
一
幸
一
勝
稔
子
英
浩
一
延
政
浩
雅
勝
一
常
和
幹
政
修
隆
正
利
裕
浩
勝
さや
介
範
春
治
則
雄
雄
好
稔
文
一
志
一
己
幸
実
明
忠
治
一
昭
友
男
美
夫
守
昇
斎
稔
一
美
志
修
正
弘
文
木
井
下
田
持
吹
永
丸
高
磯
島
田
﨑
口
越
柳
津
啓
正
正
義
義
聖
美智
正
正
仁
博
甚
和
裕
紀
洋
栄
美
重
一
清
保
誠
正
清
一
武
鈴
永
山
岡
倉
矢
神
才
大
小
中
坂
岡
田
水
青
阿久
宇都
金
飯
高
岩
海老
山
矢
藤
益
松
梶
大
山
三
長
酒
永
石
鈴
佐
田
日下
吉
大
桑
鈴
寺
後
坂
木名
石
中
大
菅
齋
鈴
鯉
染
又
白
木
成
河
塙
久須見
久
弘
郎
勝
實
浩
敏
夫
一
弘
孝
一
和
志
文
明
士
夫
治
正
忠
郎
良
明
晃
行
貞
堅
勝
文
勇
志
則
夫
美
司
幸
一
剛
浩
一
郎
壽
吉
樹
己
一
次
也
彰
一
司
行
博
孝
潔
子
美
夫
雄
二
儀
正
惣次
一
和
健
正
純
伊
真
毅
和
博
貞
賢
吉
英
在
武
弘
博
利
将
敏
浩
泰
文
和
浩
正
憲
正
一
清
二
浩
太
英
克
真
豊
伸
正
正
善
好
妙
裕
泉
秋
伊
鈴
中
宮
富
山
松
松
藪
池
森
高
中
工
工
木
篠
大
玉
道
篠
菅
椎
那
大
薄
宇
小
金
竹
岩
沼
橋
古
鬼
田
内
和佐
小
難
神
半
加
安
伊
鈴
木
大
高
金
大
中
安
中
中
山
澤
葉
藤
木
臺
野
下
口
丸
丸
﨑
田
田
橋
島
藤
藤
村
塚
平
井
下
塚
谷
名
智
木
井
井
川
坂
尾
澤
尻
村
山
原
中
山
間
川
波
定
場
藤
西
原
木
曽
竹
浦
綱
野
後
田
川
村
城

茨城

海老
戸
野
根
祭
口
正
秋
良

也史三司みゆ美治行幸直磨彦郎幸浩和毅則明浩満学次厚文義勇夫弥治生彰一夫企芳彰児彦久彦之毅史之樹吾也幸基知郎幸策昭造幸崇宏広也美功
直裕一耕ま由千秀昌正和美恵一英隆英　勝和章　龍　吉明　章卓純信洋浩政宏月　裕邦和昌勝　貴貴和眞真定誠伊重啓和泰弘浩康貴達政交
田深村下　西中林石濱尾澤本島上田垣田西上枝脇越里田本根本石田﨑本田木内下村野井西兼本井上上本田下澤田賀尾納田岡口本江田村田越
生常三山藪大田小三長西長森中村上西岡小村松辻船仁安村山山大増尾山中植竹松三岸今小依山熊村井山松松吉岸徳後左奥冨山寺春山中島河
一男彦勝平巧也明治茂作美和明豊男郎範孝広子
庄久豊俊作　和英芳　唱正已三　満賢一直義正順
田井村本　田谷野山田内井中杉田邉見北　井倉
冨下西阪中石中平奥山山亀田大西田岩大室長居

兵庫

藤本　　泰伸裕貴剛和真秀欣雅正博崇晶照申義秀　幸勝範和その正典和壽伸正一利　景道剛芳善有
藤辻岡南川藤濱渡片中岡井前加中島小石朝比植坂山高山大普宇和木大藤石糟高花大戸上松中
正輔元一行史也二明也博行文昭則夫次之典茂隆利明弘美隆男人孝治利幸昭勉造務史宏行治
美久彦二巧彦志明己夫聡輝
博佳伸英　義充正勝正　博
井村川　下部田坪田口松村
今野桂原木安吉倉柴堀戸二

京都

野瀬　二三男二徳二孝樹稔二彦武博司一吏和正司広稔裕謙学美之均幸史馬樹寛義治巳一志行子宏樹孝孝子也
山上田　俊雅永康茂　浩明　正武浩秀照重隆伸　康　宏尚　一和東敏基正竜克誠太博睦隆和和英愛淳
河野尾山　長谷川
平西勝長田井村垣谷谷原西井田谷内田田山田島下見森田原山吉村戸本　谷田光田月賀内模田
西勝田川正中小藤中櫻須佐竹吉津杉余間真塩金西柏西國西城山北居稲末鎌望千垣相高

大阪

烏酒川蔦　野井端田　月雅和直　一博廣彦

岐阜

恩山後苅舘相松伊牧木佐大下下安寺小宮佐長藤和谷久宮戸原勝見村近中所水足大奥中鈴中駒
田下藤谷林撲久藤野村伯脇林田邊本達田椋田木屋氏田本野下部　川廣井藤山　口立堀村嶋木井月
康一功智久嘉利裕勇文浩忠利秀正則和　佳哲廣浩毅基隆哲昭敬博直篤　義俊良　健直かおる登弘彦明
雄秋一安宜史光之三彦二久幸一廣夫良進則浩行樹至司治也人司明人司晃昭博保浩二樹
幸剛隆樹昭和朗之樹律広功哉昭介也司子
功好　茂智宏伸一利茂成芳　徹崇敬俊浩靖
岩倉本根月山中野西佐藤本本松原原崎田上
野ヶ曽望内田峰河相佐岩山小佐榊尾山井

久久裕幸人昭久宏助典明守次功一雄久美夫人治義美猛徳準彦洋之　史一一良浩始之則也彦彦司人江之美一彰紀郎伸章正夫志典司久郎薫彦彦
知修雅秀直輝博正金辰　孝始源喜久和玲富士正茂寿春　佳　勝勝寛
山村原　知木木口口本杉坂井田原井田野村村戸藤迫木下木筒松井　親昭裕信伸　裕將達一明安壽まり貴清修　秀昌泰文　統礼洋寛富達　敬淑
小北石林加鈴鈴洞山塚若釜横吉榊安武水河岩井佐小青竹佐々井村筒

静岡

土間山鈴土伊森大鍵齋常成尾牧鈴川後桐加海望内大望今酒杉藪藤山杉佐　屋橋本木屋奈本隅山藤盤島沢田木口藤部納野月野塚月村井井崎原下山藤

元弘一之平信夫武人郎昭正哉郎弘克正一子
　政克雅茂幹喜秀浩一元行和昌一昌宜　純恵理

愛知

近齊水木加加島青内山原佐山丹内赤竹多治真戸柴片伊酒今犬益和奥谷伊小大野西加河伊稲尾筒小
藤藤藤野全藤藤本山海田　藤本羽藤須内見野屋田岡藤井井塚満田村　藤林脇田井藤村藤垣関井林
　保鈴一静守　千正　憲好正隆正　静光修俊憲幸正浩雅美東光知縣克吉益　寿敏　成敏淳孝
　守男雄光夫雄功晃秋夫仍治穂美志幸猛鐘一身之明子一人人男喜文雄令司己高生誠明幸周治彦夫浩
川村西浦上城藤西野本村岡田出田口本川口
中西今三井岩伊大天岡中森繁前岩山岩前山

司秀雄利賜美昭彦晃明男彦貴博正治樹和政恵
修明富重弘義敏房正繁充一清　金芳繁美秀佳
束　内内川本船谷東田本島田塚平尾野平山尾田
細橋竹井平橋口南坂武谷平和手實島堂杉中稲
弘好伸美誠信二高壮伸登明次行子
道信幸忠　泰裕清眞　静弘順博ミス
田丸尾浦藤附海上上木田脇川原林
植田松三高見内川井荒作宮岡大小

山口

山田　成清一博義和暢和育勝龍喜幸眞哲里信義
藤井水岡越田本田根　川　田村岡村　上田本田川岡　康孝眞逸俊　康　忠達清敏勝
深西船池木川戸森荒新上藤長中秦村鶴宮堀宇勝森山丸柳木角神藤川國内山末
明美男和彦幸一男雄彦雄子則治栄哲夫明夫明貢章英彰之雄二博廣雅剛男則秋雄次

徳島

齋木　俊　一雄
福田　和敏彦
立見　博文
金磯　新次郎
森　公　一
平坂橋々正
三佐　正純

香川

荒木　圭　一孝
宮武　勲
山下井　明
平宇野崎　忍
浜　義　勝
大美西藤　雅悟
西松山本宏文
藤本田滿之
平田西輝代
大宇川　雄
北野本網　積
高　敬　孝
中森島　仁
森大西　廣実
大石西　康三
西塚　幸悟
昭志
裕一義

愛媛

鈴木　博　文紀
寺尾　克久男
石川　喜治
飯尾　英治
山内　敏男
武田　良一
伊東　章
上野　伸治郎
岡部　博記
弓山　泰孝
渡部　純三
南條　定信
池田　真三
渡邊　和幸
赤瀬　君平
島本　計治
山本　直幸
白石　雅己

奈良

横田　昌　浩雄
平尾　俊　次
宮本　則　正
奥山　一
野田　潤　志
松馬　博　男
新谷　壽　司
丸森　啓　三
増田　金　涉
高垣　孝　明
田中　靖　司
永澤　由　晃
福岡　丈　久
田中　孝　男
山岡　清　司
村上　浩
西谷　康　義
岡本　康　文
水口　一　郎
中井　誠　司
別所　悦　子
西川

滋賀

林下　平　次
小林　伸一郎
安井　善　次
野寺　義　浩
弓削　一　生
武友　正　利
西野　仁　之
森　信　一
安井　朗
葛原　千　也
髙畑　宏　亮
神細工　宗　宏
岸田　公　作
中村　幸　範
松田　万　石
小川　詳　市
森江　謙　司
坂口　兼　一
足立　勝　次
秋岡　良　博
小西　又一郎　明
小川　英　幸
小澤　和　司
横山　隆　司
若林　井　子
岩井　和

和歌山

道上　敏　夫
達谷　良　章
堀　誠　良
大江　尚　次
木村　正　男
山本　順　人
竹井　廣　幸
泉　政　一
山崎　明

鳥取

牛尾　光　穂
坂本　福　朗
加藤　雅　夫
森原　伸　治
佐々木　慶一郎
澤口　典　夫
岡田　隆　司
池本　歳　幸
米田野　忠　茂
牧井　博　幸
石本　國　司
福江　敏　夫
大倉　美　広
石村　佐子
米

島根

沢田　守　男
増本　昌　雄
新宮　大　輔
小谷　慎　勉
引野　良　治
野津　隆　文
山根　一　司
野村　政　男
野田　達　利
福間　富　隆
龍澤　昭　也
黒田　千　広
小玉　孫　雄
藤原　津　淳
小玉　千　子
中嶋　市
松本　清
藤原　浩
本山　彦
黒田　耕
滝本　豊
渡辺　光
亀山　重二
本　真
辺
山

岡山

森　崎　文　一
安　藤　敬　三
赤　木　政　治
渡　遉　申　登
井　原　秀　博
三　宅　徳　秋
今　東　勇　雄
廣　畑　哲　介
坪　井　幸　茂
太　田　幸　也
福　田　俊　司
北　村　知　典
木　村　洋　彦
畠　瀬　信　之
谷　田　和　幸
串　崎　公　修
山　屋　賢　吾
守　谷　健　政
芦　本　讓　典
坂　越　利　治
鳥　本　泰　二
山　科　佳　磨
仁　淵　庸　二
原　岡　勝　和
梶　坂　政　士
赤　柳　豊　計
高　井　幹　一
石　田　基　志
島　本　勝　幸
石　崎　年　彦
濱　屋　一　栄
菊　田　敬　隆
前　取　陽　一
鷹　本　昭　一
松　峠　行　靖
大　田　安　則
藤　田　正　博
塩　田　博　徹
南　條　峰　健
尾　上　勇　人
岡　室　直　茂
石　井　智　巧
立　岩　正　好
橋　本　志
鈴　木　年
吉　田　一
小　本　一
瀬　木　靖
細　田　則
萩　藤　博
川　原　徹
藤　上　健
澤　人
隆紀二昭武明人秀昭
康恭栄隆義春伸安昇
谷野橋原藤川井野津
嵐廣石塚伊吉中河野
次之男洋人一司弘雄哉喜夫昭文旨哉雄夫久秋保
義清佳光俊知哲昌茂楠清康裕輝寿一則敦友千
西芝口崎本山谷田佐野原中田田松下次本井沼木
中中濵江山黒小山和吉桑田吉和吉木木梅古長佐々木

治二親二文一一彦治一德二恭豊美一弘幸児豊二也義幸治弘行喜行伸一德明征保博一子子
要英憲英博恭潤勝信賢弘新髙　弘英光輝早　譲伸繁晴哲安一竜義好純克文修　義幸良三枝
後　藤石尾里田上部永永木田村池下間川本川上川嶋田田松方本原本下永冨原　本中木島濵本
知名松古前村跡豊豊八津松菊竹大坂浦寺早井住牧清岩成緒山桐藤木吉谷千辻松田黒野長宮

宮　崎

川　崎文章
横　山伸一
貴　島康弘
矢　野武利
西　領敏一
川　越宗次
植　村正和
秋　野敏光
河　野隆士
中　竹光
上　村司
福　重弘
大　浦透
水　倉昭
朝　嶋宿
貴　野太郎
指　松利
高　崎憲一
小　木浩樹
金　本憲毅
黒　山茂二
野　昭雄
長　善
宮

成郎敏直也明文彦美徳弘和幸廣尚　夫也冨博彦苗一次平郎生一一彦博嘉美弘章介穣文幸吾徳人郎継一生洋成弘郎治三雄也徳史二秀司也義一
哲信一文政哲正博和晴一英敏忠邦勝　壽伸久隆亮早俊保雄二明慎惣稔信　義一博圭　勝寛金兼伸良浩住公智和敏太賢雄和達孝桂雄幸啓誠一準
賀場尾崎中崎口口中村賀田安口田　村本井本山川上岡上野垣下　口村須林口下　山村川山本本元島田田塚野原田部村宮澤野斐藤下部下松川
古馬松倉田宮田山田中古野末坂福

熊　本

西山永寺小平古西浦上志尾泉谷野那竹宇戸竹森丸中黒平松福釜元尾黒大髙桑古隈中二矢梅甲加岩隈竹時宮

行文次治次二幸一輝二弘郎男成生憲範幸明美男史誠男児郎之子貴
正昭勇栄秀正信昭好伸隆豊三哲康哲和義廣利秀初洋孝文眞秀一博登
浦田東藤生邉山丸藤地尾原島立村邉掛中金島野野藤山見見田居
三池安江麻田中得佐宮横梶中足岡田沓田荒江上浦佐下穴喜繁鳥

佐　賀

納　富光次樹
野　田和也司
山　田鉄文
田　中正章幸
武　藤博子
田　中正彦
野　中伸行
渡　田夕広
内　山俊一
西　田孝仁
辻　田孝洋
小笠原　昌
徳　田浩昭
池　田敏直
田　中宏資
毛　利政治
浅　山志
川　添永久
古　藤宏義
本　多哲秀
松　尾　和幸
岡　本清宏
大久保勝猛
前　田昭也
原　田則
川久保英
藤　本作
古　村博
田　中孝
松　本博
中　島
隅　地
江　越

行明喜治和人男孝繁江雄敏男守男也明秀一広博茂敏仁弓大朗馬豊美彦雄賀孝雄美男生藏之實則博昭明則次郎
孝　一幸邦清年忠　範岸博竜　輝哲浩孝清幸敏　和真直慶司一　勝幸明章裕富士由知真美秀米克利芳和雅　忠実一
野内翁　村　田邉牧永本本本西下原谷田　藤島賀城藤藤原川石　尾田場科野崎中末丸本尾尾野宅宮田野口
脇山永萬吉長髙渡荒吉松藤山中木梶長岩辻南斉大古大衛武北下大岡永野馬山矢相田武田松松松飯三宇都永桒田

大　分

小　野覚
中　川義
藤　井明
上　野徳
宗　和明
田　北利治
一ッ松利
長　吉榮
川　津堅
間　地治
鶴　原弘
御手洗幸
佐　藤

治昭則代秀俊郎人徳久吾茂光彦郎二憲幸徳好隆博勇信義治稔勝光一彦文泰隆夫平伸雄幸明浩弘郎広昭行春重秀
隆隆勝菊雅政司元和主健盛善一耕一啓宗壽昭和正正　義光宣　良敏和孝國　昭昇正敏政弘則悦惠太和辰俊好庄
尾　本巻瀬田野川伽野井下屋田永佐川田留髙原田本川田本　田本口田木平賀田口　江尾原藤田柳石永田尾口本
松西西松荒川福吉下補平福松丸磯末岩長谷柳永日中平古濱小橋小牟田柿溝松荒大古林川濵村中宮須永小三岩藤平山楠

福　岡

井　上勘昭
桑　原繁郎
内　田恒太久
森　住哲之
光　安久規
三　島国松
石　清健二
白　孝司
大　達也
松　真享
萩　誠
尾　本孝夫

男利郎治晋二胤之泉也明久仁学平文夫樹吉悌孝一博志猛浩生三治彦吾人幸介子美
伊勢宗陽一修　健公康　卓一和清　松俊邦直恒郁吉浦明保　忠新聖定慶二三一俊華朱

高　知

世治之志治人進明友一夫喜郎長彦幸一道彦三己子
弘　間保正弘盛正直　正好章幹直正二福儀義雄孝匡惠勝日信
土　居
福　岡井部田田地崎本浦松藤岡村岡田原田山尾崎
平　安
岡　種
山　岡
橋　松
兼　齊
清　上
田　門
大　門
横　上
嶋　崎

長　崎

平　井　健
崎　上谷部澤井岡友口辺内部田岡上内脇口野井瀬下橋崎藤桐崎下垣田島飼川村鍋石
三三烏渡木長梅重水渡山渡鎌増村宮宮呑浅亀廣山髙塩遠片岡木稲池八十犬髙木眞白

中武益実
林田光博
濵砂敏朗
都甲牧人
稲村英之
堀川誠一
甲斐秀樹
藤本隆雄
東和範
長野助典
長岡美喜男
畠中弘幸

黒木明文
飯干真次
榎木常市
渡邊恵
桑俣公子

鹿児島

脇田克朗
竹ノ内優
安樂剛
手島孝嗣
牧耕志

川畑洋一
奥野勇人
川邊寛行
池之上淳一
野添節夫
竹添正光
柳田三男
村吉哲哉
松元達也
上園洋一
松下剛
井上修二

柿木園晴美
吉原寛二
前屋満治
中馬信博
蒲生義幸
石川義則
伊地知康昭
木場敏昭
中釜陵一
折田政行
福山昭雄
篠原昭廣

永井政義
持留幸二
米滿憲一
上馬場久志
彌榮義和
上新薫
家村仲五
丸尾省吾
山下和代

沖縄

玉寄長賢

大城盛徳
瑞慶覧朝孝
新崎哲弘
新垣茂
照屋栄
兼城正光
上原清
久高清美

勤続章受章者　7,012名

北海道	村井広樹	他523名
青森	小泉洋一郎	他159名
岩手	島田金藏	他344名
宮城	櫻井明也	他353名
秋田	青澤尚人	他277名
山形	大沼俊一	他82名
福島	長南重一	他192名
新潟	吉田浩衛	他227名
東京	平位誠一	他166名
神奈川	三浦昭雄	他114名
埼玉	清宮博	他138名
群馬	町田徳之助	他58名
千葉	上野宏勝	他186名
茨城	谷津文昭	他185名
栃木	松本茂	他 58名
山梨	曽雌林	他 75名
長野	井出大広	他 32名
福井	山口武津雄	他 34名
石川	黒瀬純一	他 59名
富山	高原一也	他130名
三重	伊藤和男	他 67名
愛知	米倉英吉	他129名
静岡	秋山京吾	他 47名
岐阜	青木哲朗	他 35名
京都	平元芳夫	他103名
大阪	塚本彰宜	他105名
兵庫	三木康伸	他200名
奈良	楳木勝徳	他119名
滋賀	秋岡勝博	他 61名
和歌山	生駒直也	他181名
鳥取	増田篤規	他 73名
島根	河原由里子	他116名
岡山	小村雅紀	他317名
広島	大道忠則	他262名
山口	塚本幸信	他205名
徳島	谷村清	他111名
香川	三好義光	他116名
愛媛	高橋宏明	他213名
高知	片田浩	他129名
長崎	辻博文	他126名
福岡	山口廣幸	他141名
大分	小野政則	他167名
佐賀	中原長正	他58名
熊本	大澤正	他148名
宮崎	矢野良一	他109名
鹿児島	井ノ上一紀	他214名
沖縄	金城薫	他 21名

優良婦人消防隊（表彰旗）　12隊

都道府県名	消防隊名
岩手	八幡平市婦人消防協力隊安代地区隊
宮城	仙台市宮城野地区婦人消防隊
山形	大沖婦人消防隊
神奈川	汐入婦人消防隊
茨城	常総市女性消防隊
栃木	那須烏山市女性消防隊
石川	宝達志水町子浦女性消防隊
滋賀	世継女性消防隊
岡山	峠地区女性消防隊
香川	善通寺市筆岡婦人消防隊
高知	室戸市宮の内女性消防隊
宮崎	西都市女性消防隊

優良婦人消防隊員（功績章）　18名

都道府県名	氏名
岩手	元村トモ
岩手	熊澤優子
宮城	櫻井よしみ
宮城	佐藤トシ
神奈川	加藤孝子
茨城	千葉武子
栃木	渡辺美子
石川	森ちえ子
愛知	鈴木美智子
愛知	木村多美子
奈良	梅本道子
滋賀	旭百合子
滋賀	西村ひとみ
和歌山	和田恵美
岡山	片山冴子
山口	岡村昌美
香川	泉淳子
高知	松本眞由美

都道府県消防協会等役職員永年勤続者表彰受章者　10名

日本消防協会	柴垣謙
日本消防協会	松尾賢一郎
日本消防協会	工藤哲久
新潟	南波美智子
神奈川	瀬川良子
埼玉	鷹野淳子
福井	辻岡陽子
富山	平井仁美
長崎	東園麻里子
福岡	高木貴代香

㈶日本消防協会及び全日本消防人共済会の役員会議の開催

㈶日本消防協会

平成26年２月28日（金）、財団法人日本消防協会の役員会議が日本消防会館において開催されました。

財団法人日本消防協会役員会議（理事会、代議員会）

平成26年度事業計画、平成26年度収支予算及び平成26年度都道府県消防協会分担金、その他各議案の説明が行われ、原案のとおり決定及び承認されました。

○提出議案等

第１号議案　平成26年度事業計画について

第２号議案　平成26年度収支予算について

○公益目的事業会計

・普通会計（管理費等を除く）

・福祉共済事業特別会計

・婦人消防隊員等福祉共済事業特別会計

・防火防災訓練災害補償等共済事業特別会計

○収益事業等会計

・日本消防会館事業特別会計

・出版広報事業特別会計

・消防個人年金事業特別会計

○法人会計

・普通会計（管理費等）

第３号議案　平成26年度都道府県消防協会分担金について

第４号議案　「定款の変更の案」の変更について

第５号議案　諸規程の制定について（理事会のみ[代議員会への報告事項]）

①「日本消防協会名誉会員推薦規程」

②「日本消防協会表彰規程」

③「日本消防協会公印規程」

④「日本消防協会特別会計設置規程」

⑤「婦人消防隊員等福祉共済事業規程」

協議事項

(1)　新法人における役員等の選任等について

(2)　山梨県消防協会への貸付について

報告事項

(1)　公益財団法人への移行認定について

(2)　新法人における役員及び評議員について

(3)　新法人における理事会及び評議員会の日程等について

諸般の報告

(1)　消防団関係新法の制定について

(2)　消防団員退職報償金の引き上げについて

(3)　消防団関係の財政措置について

(4)　平成26年度海外消防事情視察等について

(5)　消防団を中核とした地域防災力充実強化大会について

(6)　消防団応援の店について

(7)　第24回全国消防操法大会の開催及び第25回全国消防操法大会開催候補地について

(8)　第20回全国女性消防団員活性化ちば大会の開催及び第21回全国女性消防団員活性化大会の開催地について

(9)　(公財)消防育英会の状況について

(10)　平成26年度全国消防殉職者遺族会予算について（代議員会のみ）

理事会　会議風景

代議員会　会議風景

全日本消防人共済会の理事会を平成26年２月27日（木）、総代会を28日（金）に開催いたしました。

全日本消防人共済会（理事会、総代会）

平成26年度事業計画及び収支予算、役員の選任等の各議題の審議が行われ、原案のとおり決定及び承認されました。

○提出議案等

（理事会・総代会）

第１号議案　平成26年度事業計画及び収支予算について

第２号議案　規約等の一部改正について

・全日本消防人共済会総代会運営規約

・全日本消防人共済会財務規程（理事会のみ）

・全日本消防人共済会火災共済事業規約実施規則（理事会のみ）

報告事項　総代の変更について

その他　退職組合員の継続利用の承認について（理事会のみ）

第13回消防団幹部候補中央特別研修結果について

㈶日本消防協会

男性消防団員の部は２月５日（水）から７日（金）まで、また**女性消防団員の部**は２月12日（水）から14日（金）までの各３日間、日本消防会館において、第13回消防団幹部候補中央特別研修を開催しました。

この研修は、将来消防団の幹部として活躍が期待される幹部候補団員に対し研修を実施するもので、全国から総勢231名（男性消防団員の部138名、女性消防団員の部93名）が参加しました。

今回は、前回に引き続き東日本大震災の被災地消防団の活動事例紹介、災害情報と対策、防災対策などの講義のほか、総務省消防庁危機管理センター（男性消防団員の部）や東京消防庁本所都民防災教育センター（女性消防団員の部）を視察し、課題討議では活発な意見交換が行われました。

受講後の感想として、「参加した全国各地の消防団員と活動内容や取組みについて意見を交わすことができ大変有意義だった」、「講義で得た知識を今後の活動に役立てたい」などの意見が寄せられました。

平成26年度も今回の意見を踏まえ、より充実した研修となるよう努力してまいります。

男性消防団員の部

女性消防団員の部

第13回消防団幹部候補中央特別研修　講義科目

【男性の部】

内　　容	講　　師
講　　話	㈶日本消防協会　会長　秋本　敏文
消防庁危機管理センター視察	消防庁　国民保護・防災部　応急対策室長　吉住　智文
防災対策	消防庁　国民保護・防災部　防災課長　赤松　俊彦
消防団運営	公益財団法人長野県消防協会　参与　五十嵐　幸男
危機管理	Blog防災・危機管理トレーニング　主宰　日野　宗門
活動事例（東日本大震災）	岩手県　大槌町消防団　部長　鈴木　亨
災害情報	静岡大学防災総合センター　教授　牛山　素行
課題討議発表・講評	消防庁　国民保護・防災部防災課 対策官兼消防団専門官　佐藤　敦

課題討議テーマ
- 若年層の団員確保対策について
- サラリーマン化が進む中での効果的な活動方策について
- 消防団の訓練のあり方について
- 消防団活動の問題点と解決策（大規模災害時の対応）について

【女性の部】

内　　容	講　　師
講　　話	㈶日本消防協会　会長　秋本　敏文
消防団実務	東京防災救急協会　講習指導担当部長　谷口　由美子
東京消防庁 本所都民防災教育センター視察	東京消防庁
消防団活動のあり方	NHK解説委員室　解説主幹　山﨑　登
防災対策	消防庁　国民保護・防災部　防災課長　赤松　俊彦
予　　防	リスクウォッチ　リスクコミュニケーター　長谷川　祐子
話し方講座	東京都　赤羽消防団　副団長　小澤　浩子

課題討議テーマ
- 女性消防団員の役割について
- 女性消防団員の確保対策について
- 女性消防団員による新たな消防団活動の展開について

東西南北
東京

「千代田区は私たちが守ります」

神田消防団　団長　中田　禎一

1　千代田区の紹介

神田消防団は、東京23区のほぼ中心に位置している千代田区内にあります。

千代田区には、神田消防団のほかに、丸の内消防団、麹町消防団があり、千代田区水防訓練や千代田区内消防団合同点検などを通じて各団員が連携強化に努めています。

ここで各消防団の管内を紹介いたします。

神田消防団の管内は、多くが商業施設となっており、秋葉原電気街を中心に、神田明神や御茶ノ水楽器店街、駿河台スポーツ店街、神保町古書店街等が点在し様々な商業施設が軒を連ねています。

丸の内消防団管内は江戸時代、武家屋敷が大半を占めていました。現在は、皇居を始めとし、大手町、丸の内、内幸町地区のオフィス街、霞が関の官庁街、有楽町の繁華街、日比谷公園からなっており、我が国の政治経済、社会、文化等の中枢管理機能を有する重要施設が多数存在しています。

雪だるまコンテスト消防団募集活動

麹町消防団管内は、国会議事堂、首相官邸、大使館や国際機関が多数点在しており、各国首脳、国賓級の要人が来訪する機会が多くなっています。私立学校をはじめとして100を超える各種学校が点在しています。また、日本武道館や科学技術館等で催物開催が多く、不特定多数の人が集まる地域でもあります。

2　消防団の沿革・概要

享保３年に町火消しが配置され、「か組、よ組」が神田地区の担当となりました。度重なる大火を経験し、戦後昭和22年には、神田消防団として団本部及び２個分団が編成されました。現在は、団本部及び３個分団134名（女性消防団27名）が所属し、日々の活動に尽力してます。

3　消防団の活動

(1)　消防団は、日頃から地域に密着した活動を行っており、消防署隊との連携訓練をはじめとし、さまざまなイベントや祭礼等での警戒を実施しています。また、千代田区は、長野県嬬恋村と姉妹都市になっており、１月18日には神田小川町で雪まつりコンテストが開催され、消防団員は嬬恋村キャラクター「キャベツちゃん」をモチーフに雪だるまを作成し、歩道において消防団募集活動を行いました。

(2)　地域や町会での防災訓練、応急救護の指導、火災等から住民を守るため火災予

防や広報活動など積極的に参加し、有事の際には冷静に対応できるよう心掛けています。

東日本大震災を踏まえ、地域特性に応じた即時性の高い消防団活動と教育訓練のため、秋葉原駅地域を管轄する第三分団をモデル分団に指定し、教育訓練計画を策定し、教養及び訓練を実施しました。

ア　秋葉原駅を中心に、駅舎や繁華街において多数の帰宅困難者があり、多数傷病者が発生した場合の対応要領として、普通救命、応急救護指導員、上級救命講習資格取得に努め、応急救護技術の向上を図るなど、応急処置対応要領の教養及び訓練を実施しました。

イ　消防署の指揮隊及びはしご小隊が実施する消防活動技術効果確認に参加し、消防団現場本部の設営要領及び指揮本部長の下命に基づく、消防隊との連携訓練及び消防団専用無線機（MCA無線機）による無線交信訓練を実施しました。

ウ　可搬ポンプ操法大会において活動訓練の成果を披露していますが、女性消防団を対象に、交通渋滞で可搬ポンプ積載車が容易に近づけないとの火災想定に基づき、D級ポンプ操法を実施しました。

エ　千代田区の合同水防訓練において、署隊と連携してマンホール噴出防止工法を行い、都市型災害に対応した水防訓練を行いました。

オ　大規模地震発生時に、帰宅困難者や車両の渋滞による通行障害から、リヤカーによる救助資器材搬送訓練及び歩道橋倒壊等での陸路寸断が想定されることから、特殊技能団員の救命ボート取扱者に対して、消防隊と連携し河川を活用した救命ボート浮艇要領及び救命ボートの操縦技能訓練を実施しました。

カ　震災時には、中高層建物のエレベーターが停止し、エレベーターかご内への閉じ込めやビル内のドア変形による開放不能の場合を想定し、消防署の特別消火中隊の指導により、解体建物を活用して救助資器材器具を活用した救助訓練を実施しました。

4　おわりに

消防団員は、地域の防災リーダーとして、地域住民の安心安全を守るという重要な役割を担っています。今後も「自分たちの街は自分たちで守る」をモットーに、神田の心意気と使命感を持ち消防団活動に励んでいきたいと思います。

消防隊との連携訓練

イベントでの応急救護指導

東西南北
青森

「一丸となって」

おいらせ町消防団　団長　丁塚　俊夫

1　おいらせ町の紹介

おいらせ町は、平成18年３月１日に旧百石町と旧下田町がそれぞれの持つ潜在能力を、合併によって大きく開花させることをめざし誕生しました。町名の由来は、町を流れる奥入瀬川からのもので、親しみやすさと奥入瀬渓流のある地域と区別するため、ひらがな表記の町名になりました。

奥入瀬川

本町は、青森県の東南部に位置し、南は八戸市、北は三沢市に接し、それぞれの中心部には車で20分から30分の距離にあります。さらに西には十和田市があり、ここへも同程度の距離にあります。このため新幹線八戸駅、あるいは三沢空港にも比較的近く、その他にも東北自動車道やそれに連なる有料道路が南北に走り、そのICも２カ所設置され、第三セクターの青い森鉄道駅も２駅あるなど交通の便には非常に恵まれた地域です。

人口は平成26年１月１日現在、25,100人余りで、県内では稀な人口が増加している町で、人口規模も町村では一番の町です。

本州最北端に位置する県内でも、冬も降雪量は少なく、年間降雨量も千ミリ程度と暮らしやすい環境にあり、町名の由来のとおり、町の南部には国立公園十和田湖を源とする奥入瀬川が流れ、流域を潤し水田が広がっています。また、北部は台地が広がり畑作が盛んであり、東部は太平洋に面しており漁業も営まれています。

町の将来像は、「奥入瀬川の恵みと笑顔あふれるまち」と定め、「私たちのまち私たちの手で　満足度70％、納得度100％のまちづくり」をキャッチフレーズとして、情報共有に努め、参加機会と対話の場を提供し、顧客“納得度100％”のまちを目指しております。

2　おいらせ町消防団の概要

おいらせ町消防団は、平成18年３月１日に隣接する２町が合併し、消防団としても統合をするべく、平成22年４月１日に統合、発足しました。

組織は、平成26年１月１日現在、本団以下19個分団で編成されており、うち、１個分団が女性団員17名で組織されております。

団員数は、町条例定数400名に対し、349名であり、定数には届かないものの、微増の傾

向にあります。

消防用車両等の設備状況は、指令車１台、水槽付消防ポンプ自動車５台、普通消防ポンプ自動車13台、小型動力ポンプ積載車１台、防災パトロール車１台、広報車１台を配備しております。

3　おいらせ町消防団の活動

団の主な活動は、１月の出初式（観閲・分列行進・式典）に始まり、６月の地区連合観閲式の挙行、年２回春期・秋期に実施される県下一斉火災予防週間での防火予防パレードなど、このほか、各種消防訓練が挙げられます。

各分団では、毎月計画的に消防車両の機械器具点検を実施し、火災予防期間中はもとより、定期的な夜間警戒と年始年末・お盆期間・地区祭りでの警戒を行い、地域住民の生命財産を守るため、また、火災予防思想の一層の普及を図るために励んでおります。

昨年は、昭和61年に出場して以来、２回目となる全国女性消防操法大会に出場しました。大会までの操法訓練は、消防署員を指導員に迎え、訓練補助として、本団・分団を輪番制によって割り当てをして、団員相互の連帯意識の高揚を図りながら実施してきました。

結果、入賞することは叶いませんでしたが、全国大会への出場は大変有意義なものであり、町の消防機関が同じ目標に向かったことで、これまで以上に消防署と消防団が一丸となったことを強く感じました。

年末には１年間の消防活動を振りかえる「活動報告会」を実施しています。消防署長をはじめ、消防署員にも同席をいただき、ご協力のもと、消防団員としての責務を認識させるとともに、地域住民の模範となるような団員育成に努めています。また、この活動報告会後には、慰労会を開催し、団員はもちろんのこと、消防署員との相互の融和･団結を図っております。

このようにおいらせ町消防団は、消防署にご協力をいただきながら、消防署と一丸となって消防活動を行っております。

4　おわりに

火災をはじめ、近年、複雑多様化する災害に対処すべく、東日本大震災の教訓を踏まえ、定期的に分団長以上による幹部会議等を開催して、消防団員として災害に関する認識を深め、情報の共有を図り、災害等の現状を把握し、これに対する心構えを平常時から備えるよう取り組んでいます。

このような活動の積み重ねを経て、各種災害時においても日頃の訓練の成果を遺憾なく発揮し、被害を最小限に食い止め、地域の防火防災の守護人として役割を果たすよう努力していく所存でございます。

操法訓練

観閲式玉落とし競技

東西南北
大分

「『予防』それが一番大事」

日出町消防団　団長　中村　健治

1　日出町の紹介

日出町は、温泉で有名な別府市の北に隣接する、面積73.24㎢、人口およそ28千人の小さな町です。県庁所在地である大分市と大分空港のちょうど真ん中に位置しており、双方とも車で30分ほどと立地に優れています。また、「日の出ずる町」という名のとおり、地勢は全体的に南向きの傾斜地で日当りがたいへん良く、山と海に囲まれた風光明媚なところです。

立地の良さから近隣市のベッドタウンとして発展した日出町は、県内では数少ない人口増の町であり、第３次産業を主要としつつも、製造業、農業・漁業などがバランス良く行われています。

特産品は何と言っても「城下かれい」です。日出城址の下の海底に真水の湧き出る場所があり、その近辺に生息するマコガレイをそう呼びます。たいへん美味だったことから、江戸時代には徳川将軍への献上品として重宝されていました。毎年５月に開催される町の一大イベント「城下かれい祭り」では、通常よりもかなり安い値段でこの城下かれいを味わうことができるため、県内外から大勢の方が訪れます。

火災予防広報パレード

2　日出町消防団の概要

「平成の大合併」により、大分県では、市町村の数が58から18に激減しました。これに伴い多くの消防団が合併により大型化していく中、日出町では、市町村合併をせずに独自のまちづくりを進めていくことを選択したため、消防団の規模は、県内において比較的小さいものとなっています。

消防団員数は条例定数が320名で、充足率は毎年95％を超えています。７つの分団の下で21の部が活動しており、それぞれが消防車両と消防ポンプを備えています。また、14名の女性消防団員が在団しており（女性部）、昨年10月に開催された「第21回全国女性消防操法大会」に大分県代表として出場しました。

全国女性消防操法大会

3　日出町消防団の活動

日出町消防団では、毎年１月に実施される特別点検（出初式）に備え年４回の全体訓練を行う他、新入団員や新任幹部を対象とした訓練や放水に特化した訓練など、精力的に様々な訓練を実施し、団員の技能向上に努めています。また、消防操法にも力を入れており、分団対抗の町大会を２年に１度開催し、団員の放水技術の研鑽と士気の高揚を図っています。

上記のように、訓練を通して有事へ対応力を強化する一方で、私たちは、人々に防火を呼び掛ける「予防」にも、たいへん力を入れています。

日出町消防団では、数年前から、一週間に１回以上の火災予防広報を全ての部に義務付けています。ただ「やれ」と言うだけでは、なかなか活動が浸透しないと考え、団員のモチベーションを上げるために、年間広報回数の上位３部を特別点検時に表彰するようにしました。現在では、ほとんどの部が年間60～80回の火災予防広報を行っており、100回を超える猛者も少なくありません。

この活動の効果があってか、管内の火災は着実に減少しています。特に住宅火災については、この５年間で４件しか発生しておらず、死傷者はありません。団員たちもその成果を肌に感じており、そのことが自信につながって、活動の頻度は年々上がっています。火災の減少が、団員たちのさらなるやる気を掻き立て、火災の起こりにくいまちづくりが進んでいくという、少し大げさですが「正のスパイラル」と評すことのできる状態が出来つつあります。

4　おわりに

私たちの火災予防活動の成果から、火災を起こすのはほんの僅かな不注意によるものであり、人々に防火意識を持ってもらうことで、防げる火災は多いということを改めて実感しました。「町火消し」としてのイメージが強い消防団ですが、そのイメージ通りの出番が無いことが一番だと思います。「防ぐことのできる災いを防ぐ」ことが、実は消防の本旨なのではないでしょうか。

私たち日出町消防団は、火災を最小限に食い止めるための「訓練」と、火災を未然に防ぐための「予防」を車の両輪とし、地域住民の安全と安心を守るため、これからもそれぞれの活動に精一杯取り組んでいきたいと思います。

特別点検

シンフォニー（滋賀県）

「女性の絆で防火防災！」

守山市消防団　守山サンレディース分団　分団長
藤本　和子

私の住む守山市は、滋賀県南部の琵琶湖の東岸に位置し、県内最大の河川である野洲川がつくった扇状地性三角州低地上にあり、市域の総面積は54.81㎢、世帯数29,355世帯、人口80,022人（平成25年12月末日現在）を擁しています。

また、日本一の広さを誇る琵琶湖や乱舞するゲンジボタル、田園地帯に代表される豊かな自然景観をもち、市民と地域、そして企業が調和した大変暮らしやすいまちとして発展してきました。

本市消防団は、全団員が218名（定数219名）で、１本部、２方面隊、８分団で構成され、滋賀県で唯一のファンファーレ隊（音楽隊）を結成しています。

守山サンレディース分団は、平成10年４月に発足し、当時は本部付で15名の女性団員で結成しておりましたが、年数を重ねていくうちにその活動範囲も広がり、出場回数も増加したため、その実績と重要性から増員を図っていただき、現在は８分団の１つの分団として20名（定員20名）の団員で活動しており、その分団長を私がさせていただいております。

私は発足時から入団しており、当時３人の子供がおりましたが、下の子どもは中学を卒業していたこともあり、子育てと両立しての不安はありませんでした。

しかし、当初は責任感もあり、家を空けることが多くなったことから、家族から「また行くの。」といった不満の声もありました。また家事の面でも迷惑をかけたこともあり、理解を得ることに大変苦慮しました。

ところが数年経った頃、いつもどおり用事を済ませ、家を出ようとした際、息子が「頑張ってきいや。」と声をかけてくれたのです。その時の喜びは今でもはっきりと覚えており、今私が入団15年目を迎えられたのは、そ

女性操法写真

ういった家族の理解と協力のおかげであると感謝しています。

女性消防団員の活動として、消防出初式をはじめとした各消防式典の司会進行や火災予防運動中における街頭広報の他、幼稚園や高齢者宅への防火訪問、各防災訓練への出場、救命講習会の指導員、災害時における後方支援など幅広く、平成16年に軽可搬ポンプを導入してからは、ポンプ操法訓練にも取り組み、毎年開催される操法訓練披露会に男性団員に交じって参加しています。

なかでも、男性と同様に早朝に実施される非常招集訓練にあっては、いつ実施されるか分からず、携帯電話を片手に持って朝まで寝ていたり、普段は化粧をしている団員もこればかりは化粧ができず、スッピンで出動するため、うつ向き気味で集まることなど、女性としての苦労があります。

しかし、男性には負けないという気持ちはいつも持ち続け、日々活動に励んできました。

そのような中、昨年は10月17日に横浜市消防訓練センターで開催された「第21回全国女性消防操法大会」へ滋賀県代表として出場するため、分団が発足して初めて、約９ヵ月間という長期にわたる訓練に取り組みました。

一昨年11月の予選会に向けた訓練の際は、一生懸命に取り組んではいましたが、まさか全国大会に出場できるとは思わずにいたため、出場が決定し、いざ訓練となると、どれくらいのレベルまで、またどれくらい訓練をすれば良いのか、手さぐり状態でした。

また女性ということから、朝の忙しい時間帯を避け、訓練時間を夜の７時30分から９時00分として、なるべく家事、育児等に負担がないようにしました。

訓練に取り組むなか、分団長として一番心配したのは、出場要員の事故と怪我でありましたが、各自が怪我をしたら大会に出場できないという責任感を持ち続けてくれたので、途中、怪我をする者もいましたが、一度もリタイヤする者はなく、全員が無事に大会を迎えることができました。

そして分団長として一番感謝したのは、出場しない団員です。出場要員の水分補給のサポートや訓練で使用したホースの収納など、訓練の支援にあたっていただき、日によっては、少ない人数でホース巻をしてくれることもありました。

訓練当初はそのホースのまき方で、出場要員と衝突することもありましたが、訓練の後半になってくると、お互いが歩みより、締め付け具合、大きさ等を調整しながら、スムーズに準備を行うことができました。

この長期間、また暑い時期の訓練を乗り越えられたのも、本当にこの支えがあってのことだと感謝の気持ちでいっぱいです。

残念ながら大会結果は、台風の影響を受け、乗るはずの新幹線に乗れないなど、万全な体制で臨むことができず、47都道府県中22位と目標の優勝とは程遠いものでありましたが、分団の絆を残してくれたのではないかと感じております。

今後、消防団員として、そして女性として、多くの責務が求められますが、この築いた絆を糧に、市民のみなさんに喜びと感謝をいただける消防団活動に努めていきたいと思います。

非常招集訓練

災害活動報告

「台風18号に伴う竜巻災害活動について」

熊谷市消防団　団長　關根　誠一

1　消防団の概要

熊谷市消防団は市町合併を経て、現在、団員511名（定数528名）で、女性小隊を含む34分団、６中隊で組織されております。

車両等の配備状況については、普通消防ポンプ自動車32台、多機能型車両１台、軽可搬ポンプ積載の広報車1台の計34台となっています。

2　台風の接近と竜巻の発生

北上を続ける台風18号に対して、一級河川の利根川と荒川を抱える熊谷市では、有事に備えた態勢をとり、熊谷市消防団も他の行政機関と同様に、出動を念頭に置いた待機態勢をとっていました。

台風の上陸は９月16日の朝、東海地方付近と予測されていました。

16日未明、大気は不安定で雨は断続的に降り、南からの風の勢いが増していました。午前１時30分頃、埼玉県滑川町付近にて発生した竜巻は熊谷市の江南地区を通過し、熊谷市玉井付近に至る幅200メートル長さ13キロメートルにわたり縦走し、甚大な被害をもたらしました。

さらに午前２時00分頃、熊谷市西城付近にて発生した竜巻は幅200メートル、長さ８キロメートルにわたり縦走し、こちらも甚大な被害を受けました。

倒壊した物置等の木材搬出作業

3　災害活動内容

(1)　情報収集、被災者の救済、避難誘導及び被災建物の二次被害防止

かつてない広範囲かつ甚大な被害により消防本部への出動要請が多数入電し、常備消防隊は対応に追われました。これらの出動状況を無線傍受した団員、被災した地区に住む団員、さらには自ら被災した団員も直ちにそれぞれ現場に赴きました。現場に集まった団員たちは分団ごとに結集し、それぞれの分団長を中心に、暗闇の中、常備消防と協力し被害状況の把握に努めるとともに、負傷者の救護に当たりました。

団長及び副団長は消防本部に設置された警防本部に参集し、消防職員とともに現場から上がる情報の収集と被害の状況把握に努め、上陸間近の台風や再び発生する恐れのある竜巻への対策を検討しました。

日の出が近づくと状況が明らかとなり、被害は拡大しました。現場にて活動を続ける団員は、風雨の強まる中、二次被害を防ぐため被災者の避難所への誘導や被災建物の応急処置、倒木や倒壊物の除去に当たりました。

また、折しも建物火災出動も重なり、現場の分団各隊は多忙を極めました。

団長以下団幹部は、３班に分かれ現場に赴き、現場で活動する各分団を回り、状況把握を行うと共に団員を労い、激励しました。

(2)　河川氾濫警戒活動

台風18号は、９月16日午前８時に愛知県に上陸しましたが、その後は速度を早め、関東から東北を足早に通過しました。熊谷市近辺も午前中は強い風雨に襲われましたが、正午頃から次第に弱まり午後には治まりました。

風雨が治まった後も、管内の河川は増水しました。水防団員を兼ねる団員が多いことか

ら、災害対応後も分団車庫に残り警戒を続ける分団もありました。

12時20分には荒川水位の上昇により水防準備警報が発令され、また、利根川も水位が上昇し14時20分に水防準備警報が発令されました。

19時30分に警報が解除されるまで、竜巻被害対応に併せて水防警戒活動を行いました。

なお、16日一連の災害対応活動隊は全34分団中26分団、活動団員数は197名に及びました。

(3) 自発的な復旧支援活動への参加

竜巻被害の緊急対応が一段落した16日夕刻、団長は副団長以下全34分団長を招集し、今後の対応を協議しました。

翌17日早朝、団員による竜巻被害の大きかった地域での復旧活動が行われました。活動内容は主に人海戦術によるがれきの撤去で、建物倒壊や一部損壊建物の応急修繕も含まれました。参加団員は連日の活動にもかかわらず、125名の団員が集まりました。

被災直後の迅速かつ人海戦術の支援活動はたいへん効果的であり、復旧活動を推し進めることができました。

その後も被災地域を管轄する分団では、毎日、夜警巡回活動を行い、防犯にも寄与しました。

なお、月末まで行われた夜警巡回活動には、延べ650名の団員が従事しました。

4 おわりに

熊谷市消防団は、平成19年２月13日発足以来、地域住民の安寧秩序保持のため、水火災、その他各種災害の予防、警戒、鎮圧活動に団員一体となって精励し、住民への防火思想の普及並びに高揚に努めております。

しかしながら、団員の被雇用者の占める割合も年々高くなり、今後は日中における災害時参集率の低下等の諸問題にも取り組んでいかなければなりません。

こういった現状を踏まえ、団員の環境整備と結束力を高めるための研修や訓練を数多く行い、大規模災害等の対応強化を整備して参ります。

先輩方が培ってきた伝統を大切にし、「地域は地域で守る」という郷土愛に燃え、地域住民の生命、財産を守る地域防災のリーダーとして、十分な自覚と使命のもとに、市民の皆さんの期待に応え、災害のない明るい安心、安全な熊谷市、そして地域づくりに貢献する所存です。

支援活動の陣頭指揮をとる關根団長

道路を封鎖した立木の撤去作業

畑や空き地に飛散したがれきの撤去作業

災害活動報告

台風18号
『気象庁運用初の「大雨特別警報」発令』

小浜消防団　団長　竹中　嘉浩

1　小浜市の紹介

小浜市は、福井県の南西部、若狭地域のほぼ中央に位置する人口約31,000人の市です。古代から日本海を隔てた対岸諸国との交易が開け日本海側屈指の要港として栄え、陸揚げされた大陸文化や各地の物産は「鯖街道」などを経て近畿圏にもたらされました。

北は若狭湾に面し海岸線一帯は、若狭湾国定公園に指定されています。リアス式海岸線には荒波が作り出した岩々と綺麗な海水と美しい砂浜の海水浴場が広がっています。南は、東西に走る京都北部一帯に連なる山岳で、一部は滋賀県と境を接しています。

平成19年、NHK朝の連続テレビ小説「ちりとてちん」の舞台となりました。

平成23年、NHK大河ドラマ「江～姫たちの戦国～」では浅井３姉妹の次女「初（はつ）」が若狭小浜藩の藩主京極高次の正室であったことから現在でも多くの観光客が訪れています。

また、和食のユネスコ無形文化遺産登録を受け、全国に先駆けて「食のまちづくり」に取り組んできた小浜市では、「小浜を世界にアピールする追い風だ」「若狭塗箸を世界のブランドに」と喜びの声が上がっています。

松崎晃治小浜市長（若狭消防組合管理者）は、今回の登録を受け「『日本食文化』小浜から世界へ」の新スローガンの下、国内外に小浜を発信していく考えを示しております。

2　小浜消防団の概要

小浜消防団は平成25年４月１日現在、１本部10分団34部で構成されており、団員数は340名でその内女性消防団員は７名です。

特筆することは消防団の条例定数340名を常にキープしており、充足率100％を誇っております。

運用資機材は消防ポンプ自動車５台、小型動力ポンプ付積載車10台、小型動力ポンプ39台を配備し小浜市全域の防火、防災に万全を期しています。

また、部長以上に対するメール配信を利用し災害発生メールを一斉送信することにより、災害時にはより迅速かつ効率的な伝達に努めています。

冠水した小浜市江古川区

3　台風18号による被害概要

大型の台風18号は９月16日、日本列島を縦断し、広い範囲で大雨となりました。

気象庁は福井県、京都府の全域、滋賀県のほぼ全域に８月30日の運用開始以来、初めて大雨特別警報を発表しました。

小浜市に15日未明から降り始めた雨は、台風接近とともにその勢いを増し、16日朝までの24時間雨量が384ミリと同地点観測史上最多を記録、また降り始めから48時間雨量は413ミリを記録しました。

15日17時50分に「大雨（土砂災害）警報」、19時10分に「大雨（浸水害）洪水警報」が発令され、小浜市では16日０時00分、災害警戒本部が設置されました。

その後、雨は激しく降り続き、０時43分「土砂災害警戒情報」、２時10分、市内全域に「避難準備情報」、３時30分に「避難勧告」が発令されました。

各方面からの被害状況をうけ、５時10分に災害対策本部が設置されました。

市内に流れ込む１級河川の北川、２級河川の南川は氾濫危険水位を大きく超え、北川支流の野木川堤防が決壊、また南川中流に架かる飛川橋の流出、忠野区では土砂崩れにより住宅など4棟が全壊しました。

また、市内各地で家屋の床上・床下浸水、主要道路の冠水の被害のほか、土砂崩れにより主要道路が寸断され、孤立集落が発生するなどの甚大な被害が発生しました。

流出した飛川橋（小浜市中井）

土砂崩れにより住宅など４棟が全壊（小浜市忠野）

4　消防団の活動

災害発生の危険性が高まったため、15日22時45分に全消防団員340名に待機命令を発令しました。後に判明したことですが、この時点ですでに水防警戒活動に入っていた分団もあったようです。

16日０時00分に全消防団員に出動命令を発令しました。

初期活動として、市内のいたるところで発生する小河川の氾濫に際し、積み土嚢工法を実施し被害の拡大を防止しました。

また、避難勧告発令前から自主避難を呼びかけました。これは、地元のことを良く知る団員が危険を察知し自らの判断で行動したものです。これが功を奏し、市内全域にかけて甚大な被害を被ったにもかかわらず、人的被害が皆無であったことは特筆すべき事柄です。

避難勧告発令後は、さらに住民に強く避難を呼び掛けました。また、一人暮らし老人など、自力避難が困難な住民を開設された避難所へ搬送しました。

冠水した道路および土砂崩れ発生危険個所等の道路を封鎖し、車両水没などの二次災害を防止しました。

河川堤防の決壊により、主要道路が冠水し孤立した小浜市太良庄区の被災地に対し、ゴムボートなどを使用し安否確認にも行っております。

北川支流の野木川堤防が決壊（中央右）

大雨警報の解除後も、主要道路や集落に流れ出た土砂の排出等災害復旧作業も引き続き行うとともに、市内各地の被害状況調査、巡回等を実施しました。

各団員は15日夕刻から夜を徹し活動し、16日15時30分の避難勧告解除まで、20時間にもおよぶ活動でした。

なお、小浜市の被害状況を総括すると、人的被害はなかったものの、住家被害が全壊２戸、一部損壊４戸、床上浸水42戸、床下浸水153戸となっております。

5　活動報告会での意見を踏まえた今後の課題

10月18日、各分団長を招集し台風18号災害活動報告会を開催しました。

団長として、活動に対して労いの言葉をかけ、今後の活動に活かせるよう反省点を踏まえ忌憚のない意見を求めました。意見の一部を紹介します。

冠水した県道で立ち往生する乗用車

１．待機命令が遅かった。
２．大災害では建設業界と連携が必要。
３．土嚢用の土のストックを増やす。
４．災害対策会議などに消防団連絡員を派遣し情報を共有する。
５．マニュアルの作成。

以上のような建設的な意見が出ました。

まとめとして、災害への備えと指揮系統の再認識について、検討課題として精査し、今後の活動に活かして行きたいと考えております。

6　終わりに

今回の災害に際し、財団法人日本消防協会様から、公益財団法人福井県消防協会を通じ、非常用食料を交付いただきましたこと厚くお礼申し上げます。

また、県内外から災害ボランティアとして、多くの方々にご支援いただきましたこと重ねてお礼申し上げます。

個人的なことで恐縮ですが、今回の台風で私の住む地区も被害を受け、災害ボランティアの皆様に活動いただきました。被災した家の縁の下に入り泥だらけになりながら作業をされるボランティアの姿に心を打たれました。そして、「この恩返しはきっと…」と心に誓いました。

東日本大震災をはじめとする、大地震や大型台風の襲来等これまで経験したことの無いような大規模災害が各地で起こり、消防団への期待が更に高まっていることを今回の台風でひしひしと感じております。

幸いにも当消防団は人員の不足もなく地域住民の消防団における信頼は非常に大きいものがあります。あらためて地域防災のリーダーとして自覚を高め、郷土愛を持ち続け、地域住民が安心して暮らせるよう努力していきたいと思います。

都道府県消防協会事務局長会議の開催と第24回全国消防操法大会出場順抽選会を実施

㈶日本消防協会

平成26年２月21日（金）午後１時30分から日本消防会館５階大会議室において、都道府県消防協会事務局長会議が開催されました。

会議は、秋本会長の挨拶のあと、総務省消防庁横田総務課長より平成26年度の消防庁予算（案）の概要等について説明がありました。その後、日本消防協会各部の平成26年度事業説明が行われました。

事務局長会議の様子

第24回全国消防操法大会出場順抽選会

会議終了後、平成26年度に実施されます第24回全国消防操法大会の出場順を決める抽選会が実施されました。

抽選結果については以下のとおりです。

第24回全国消防操法大会　出場順

コース／出場順	ポンプ車の部	小型ポンプの部
1	和歌山県	広島県
2	静岡県	鹿児島県
3	神奈川県	滋賀県
4	東京都	青森県
5	三重県	岩手県
6	富山県	大分県
7	徳島県	島根県
8	福井県	千葉県
9	長崎県	石川県
10	北海道	兵庫県
11	熊本県	岐阜県
12	山形県	京都府
13	高知県	愛媛県
14	大阪府	東京都
15	埼玉県	群馬県
16	茨城県	佐賀県
17	長野県	福島県
18	宮崎県	岡山県
19	秋田県	新潟県
20	鳥取県	奈良県
21	沖縄県	山梨県
22	香川県	愛知県
23	福岡県	山口県
24	栃木県	宮城県

※　ポンプ車の部の出場順について、奇数が第１コース・偶数が第２コース

※　なお、東京都については開催地として両部門へ出場申請があり抽選を行いました。正式な決定は４月の大会運営委員会で決定いたします。

少年消防クラブ指導者交流会を開催

少年消防クラブ活性化推進会議

少年消防クラブ活性化推進会議（事務局：㈶日本消防協会及び㈶日本防火・防災協会）では、２月８日（土）及び９日（日）の２日間、モデル少年消防クラブの指導者を中心に「少年消防クラブ指導者交流会」を東京都内で開催しました。

本交流会には、全国の少年消防クラブ指導者約60名が参加し、日頃のクラブ活動や、昨年８月に徳島県で開催された少年消防クラブ交流会での体験を発表していただきました。また、活性化推進会議の専門委員でもあるリスクコミュニケーターの長谷川祐子講師による講演や、来年度開催予定の「少年消防クラブ交流会」全国大会についての説明と意見交換が行われました。

今回の交流会で得た情報や知識をそれぞれの地域に持ち帰っていただき、今後の少年消防クラブ運営や活動の一層の充実が図られることを期待しています。

【概要】

１　２月８日（土）

活性化推進会議秋本委員長の主催者挨拶、消防庁赤松防災課長及び文部科学省学校健康教育課河村課長補佐の挨拶後、事務局から「少年消防クラブ活性化推進会議の来年度事業」と「少年消防クラブ交流会の開催結果」についての報告後、モデルクラブを含む５クラブからの活動事例発表が行われました。

秋本活性化推進会議委員長

消防庁　赤松　防災課長

文部科学省　河村　課長補佐

○活動事例発表

富丘少年消防クラブ：小林　環　氏

三郷市少年消防クラブ：五十嵐　敦　氏

土成中学校少年少女消防隊：鈴田　真二　氏

山崎少年消防クラブ：江口　正弘　氏

伊平屋村少年消防クラブ：名嘉　彰　氏

2　2月9日（日）

○リスクコミュニケーター　長谷川祐子講師による講演　「大切なものを守るために」

長谷川講師は子供たちを指導するために必要な知識や技術、心構えなどについてお話しされ、講演後には多くのクラブ指導者から質問が寄せられました。

火災時における避難方法について

煙から身を守る方法について

○交流会体験発表

昨年の８月に徳島県で行われた少年消防クラブ交流会について３クラブから体験発表が行われ、合同訓練の様子や、クラブ員同士の交流などが紹介されました。

(1)　河南町ファイアジュニア（大阪府河南町）発表者：森口　豪士 氏

(2)　府中町少年少女消防クラブ（広島県府中町）発表者：神田　直哉 氏

(3)　第東中14区少年消防クラブ（福岡県北九州市）発表者：吉田　正彦 氏

少年消防クラブ活動に参加しませんか

総務省　消防庁　防災課

少年消防クラブは、子どもたちが防火・防災について学び、訓練や講習など様々な体験を通して、消火や応急手当などの知識・技術を身につけることを目的として活動しているクラブです。学校、町内会、消防署、消防団（分団）などの単位で組織されていることが多く、平成25年５月１日現在、日本全国で4,587クラブ、小学生から高校生までの約42万人のクラブ員が活動しています。

少年消防クラブの活動内容は、クラブによって異なりますが、主に以下のような活動が行われています。

⑴　防災マップ作り

クラブ員が自分達の地域を実際に歩き、消火栓の場所や災害時の危険箇所などについて把握し、防災マップを作成することなどを通して、自分達の地域に対する理解を深めています。

⑵　防火パトロールの実施

地域の住民の方々に火災予防を呼びかけるため、消防職員・団員等とともに、火災予防運動実施期間や年末を中心に防火パトロールや防火パレードなどの防火広報活動を行っています。

⑶　研究発表、ポスター作成

防火・防災に関する研究発表会を行い、その成果をまとめたレポートや防火ポスター、防火新聞等を校内に展示したり、各家庭に配布したりして、火災予防や防火・防災意識の高揚に努めています。

防災マップ作りの様子
（北海道札幌市 東月寒少年消防クラブ）
（提供：札幌市消防局）

⑷　防災訓練等への参加

防災講習会や防災訓練などへの参加、消防署への見学訪問などを通じ、火災の知識や、地震などの自然災害が発生する仕組みを学習したり、消火器などを使った初期消火の方法、ロープワーク、応急手当の方法などを学んだりしています。

⑸　防災キャンプ

夏休みなどを利用して、小学校の体育館や運動場、キャンプ場などに寝泊まり（避難所体験訓練）し、炊き出し、キャンプファイヤーなど普段できない活動を通して、仲間との連帯感を高めています。

少年消防クラブの活動は、命や暮らしを守ることの大切さを学ぶとともに、地域と関わりを持ち、幅広い年齢層の仲間と交流を深める機会にもなっており、人間形成や地域社会への参加の面でも大変有意義な活動です。

また、昨年の臨時国会において「消防団を中核とした地域防災力の充実強化に関する法律」が成立し、少年消防クラブが初めて法律で明記され、少年消防クラブに対する期待は、ますます高まっています。

消防庁では、毎年、優良少年消防クラブや優良な少年消防クラブ指導者に対する表彰を実施しており、平成24年度は、特に優良なクラブ16団体、優良なクラブ29団体、優良な指導者14名を表彰しました。

また、少年消防クラブ員が、消防の実践的な活動を取り入れた合同訓練等を通じて他の地域の少年消防クラブ員と親交を深める「少年消防クラブ交流会」を開催し、これまでに東日本大会、西日本大会など、全国規模の交流会を実施しております。

身近な生活の中から火災・災害を予防する方法等を学ぶ少年消防クラブに参加してみませんか。少年消防クラブの活動については、お住まいの近くの消防署や市町村にお問い合わせください。

防火パトロールの様子
（大分県佐伯市 ムササビ少年消防クラブ）
（提供：佐伯市消防本部）

問合わせ先
消防庁国民保護・防災部防災課 地域防災係　松澤、中村
TEL：03-5253-7525

頑張れ！少年消防クラブ

No.70　瀬戸市少年消防クラブ連絡協議会（愛知県）

「職場体験を通じて学んだこと」

瀬戸市少年消防クラブ連絡協議会

瀬戸市少年消防クラブ連絡協議会（会長水野義久）は市内の全21校の小学校（養護学校１校含む）と８校の中学校が加盟しており、春の火災予防運動では山林防火看板の設置、夏には消防学校１日体験、秋にはBFC防火作品展と消火技術競練会、冬には消防出初式と、多数の行事に参加しています。中学生のクラブ員による消防署職場体験も人気の行事の１つで、２月６日・７日の両日、瀬戸市立水野中学校少年消防クラブの５名が瀬戸市消防署において職場体験を実施しました。クラブ員は早速、少年消防クラブ専用の活動服に着替えた後、初日は実際の救急、救助出動が相次ぐ慌ただしい中での職場体験となりました。消防指令センターの見学から始まり車両整備、ロープ結索訓練、防火衣着装訓練、AED応急手当訓練、放水訓練、梯子車搭乗など様々な訓練を通して消防署の仕事を体験しました。２日間の体験を終了したクラブ員は「放水訓練が貴重な体験となりました。たくさん出動があって大変そうでした。」、「AEDや心肺蘇生法が難しかったけれど、身近な人を助けられるかもしれないと思い、真剣に訓練しました。」と、それぞれ職場体験の感想を語ってくれました。瀬戸市少年消防クラブ連絡協議会では今後も職場体験や各種行事、訓練への参加を積極的に推進してクラブ員の育成や防火意識の向上を図っていきます。

うちの名物団員

滋賀県

守山市消防団　守山サンレディース分団　団員

石田　美知子

滋賀県守山市からいつも元気な声で教壇に立っている石田美知子さんを紹介します。

石田さんは、地元自治会の消防隊で活動されていたことがきっかけで消防団に入団されました。普段は小学校の先生という職業柄、防火指導を重点的に消防団活動をされており、保育園、幼稚園や高齢者世帯への防火訪問、また、火災予防運動期間中の広報活動にも出動していただいています。

教壇に立って数十年、石田先生に教わった生徒達は数えきれませんが、卒業した子供達の中から、地元消防団や「全国の○○消防団に入団したよ。」という嬉しい声が石田先生に届くように、消防団活動の説明も交えながら熱い心で、日々、児童達に勉強を教えておられます。

青森県

おいらせ町消防団　副団長

門上　實

門上副団長は、18歳で消防団に入団。今では、当団で一番消防団歴が長く、町消防団の歴史を知る１人となっています。

ここでご紹介するのは、消防団活動のかたわら、町交通安全指導隊長及び三沢地区交通安全指導隊長の職務につき、活躍しているということです。

今年で交通安全指導隊員歴42年目を迎えますが、町の交通安全活動には欠かすことのできない大きな存在です。

交通安全活動では年間約50日出動しており、「指導隊の方が忙しい。」とツブヤキます。消防団活動と併せると、年間約90日は出動していることになります。

交通安全活動の一つとして、子ども対象の交通安全教室があり、子どもたちを満面の笑みで指導する一面もありますが、規律、規則には厳しく、これを曲げようとする者に対しては、「それは、ならん！」と言い切る門上副団長。町の安全・安心を真剣に守ろうとする責任感と昔かたぎは「おいらせ町の侍」と言えるのではないでしょうか。

石川県

能登町消防団　高倉分団　団員

今井　和人

今井団員は、消防団歴11年。近年ではめずらしく自ら消防団への入団を志願するほど郷土愛あふれる青年です。

地元の測量会社に勤める傍ら、地元少年野球チームで指導者や弥栄太鼓(能登町指定無形民俗文化財)のメンバーとして活動するなど能登町ではちょっとした有名人です。

日頃から身体を動かすことが得意で、ポンプ車操法では入団以来ずっと操作員を続けており、「まだまだ続ける」と言っているとか・・・

分団員や地区住民からの信頼も厚く、所属分団にとってもなくてはならない存在です。

現在独身の彼は、地元「能登町」が恋人のようです。。。

大分県

竹田市消防団　副団長

工藤　厚憲

大分は「からあげの聖地」とも称されて、その中でも大分県竹田市にある「丸福のからあげ」は創業50年B級グルメナンバーワンの人気店舗になっています。人気ナンバーワンは、鶏モモ一本丸ごとからあげです。ボリュームたっぷり、衣はサクサク、ジューシーな食感で出初式、操法大会などの慰労会で愛され続けています。

東京都

元オリンピック選手　神田消防団　第３分団　副分団長

藤原　康治

今回は、消防団員の他にヨットマンとしての顔を持つ、神田消防団第３分団の藤原団員を紹介いたします。藤原団員は、昭和60年５月に入団し、現在は副分団長として第３分団のまとめ役として活躍しています。昭和59年に友人仲間たちとディンギー（キャビンを持たない小型のヨット）を始め、主に神奈川県三浦海岸や静岡県三保海岸で練習を実施し、国内のセーリング競技に参加し優秀な成績を修めて、1992年のスペイン・バルセロナオリンピック大会に、「セーリング・ソリング級（３人乗り）」の日本代表として出場した消防団員です。今後も、培ったチームワーク力を活かして、消防団員として、地域の安全に努めてまいります。

消防団の広場

石川県「活動発表会に出場することも消防団活動の一つ」

金沢市第三消防団安原分団
団員
濱田　勇樹

平成25年度金沢市消防団活動発表会に第三消防団安原分団を代表して出場しました。安原分団が平成25年度に発表者を出すことになっていたのか、４月に入ると分団役員から私にと声がかかりました。

私は、入団して５年目。その間、ポンプ車操法大会の選手や加賀鳶梯子登り演技者ではありませんでしたが、今回、初めて分団を代表する役が回ってきたのです。話があったとき、自信がないと思いつつ、これも消防団員になっていなければ巡って来ない良い機会と前向きにとらえ、なんとか９月に発表原稿を分団長に出すことができました。

消防団員は災害が発生すれば昼夜を問わず出動するのが基本。しかし、私はサラリーマン団員であることから、以前、会社で仕事中に管内に炎上火災があったのに駆けつけることができなくて悩んだことがあります。そんな時、先輩団員から自分のできることを精一杯やればいいんだという言葉に励まされ、地元の防災訓練で自分の役割を果たすことができたことを発表の骨子にしました。

11月の発表会までに、同僚や消防署員から指導を受けるとともに、活動発表会に出場するのも立派な消防団活動の一つと思い練習したところ、金沢市の代表に選ばれました。石川県大会では、栄えある最優秀賞に選ばれましたが、ある発表者の「団員の多くが地域外へ働きに出かけている昼間の災害では、地元に残っている自分がいち早く出動しなければならない」という決意が心に残りました。

石川県大会会場の能登から２時間かけて帰ってくると、安原分団の皆さんが集まり、「よくやった。」と心から労ってくれたことがとても嬉しかったです。

平成25年度　全国統一防火標語

「消すまでは　心の警報　ONのまま」

4月の日本消防協会関係行事

4月18日（金）	第24回全国消防操法大会運営委員会

編　集　後　記

月日が経つのは早いもので、私が日本消防協会へ派遣されてから２年が経とうとしています。そしてこの３月号が、私が編集に携わった「日本消防」の12冊目となり、４月号からは新しい者が担当いたします。振り返れば、日本消防協会での様々な業務や研修は、私にとって、また他の研修生達にとっても貴重なものとなりました。それぞれの研修生は、派遣された経緯や派遣期間には違いはありますが、このキャリアは、必ずや自身の所属に生かされると思いますし、生かしていかなければならないと思っています。この春に11人の研修生が帰任いたします。色々とお世話になりました。ありがとうございました。　（M・K）

お知らせ

平成26年４月１日より消費税率が５％から８％に改定されます。

これにより、年間購読料2,388円（送料込）は、平成26年度（４月号～翌３月号）から2,448円（送料込）となります。

ご購読者の皆様には何卒ご理解をいただきますよう、よろしくお願い申しあげます。

購読募集

購読を希望される方は、㈶日本消防協会へお問い合わせください。

（問合せ先）　総務部企画担当　03－3503－1481

寄稿のお願い

皆さまの消防団活動への取り組み、ご意見などをもとに、より充実した有意義なものにしていきたいと考えておりますので、多数のご寄稿をお待ちしています。

Ｅメールでも受付しています。

soumu@nissho.or.jp

月刊「日本消防」第六十七巻第三号
平成二十六年三月五日印刷
平成二十六年三月十日発行
編集人　生嶋文昭
発行所　㈶日本消防協会
東京都港区虎ノ門二―九―十六
電話　〇三（3503）一四八一（代）
印刷所
東京都文京区湯島三―二十―十二
日本印刷株式会社
電話（3833）六九七一（代）

生活協同組合　全日本消防人共済会

「火災共済金は1500倍補償」

B型火災共済

加入口数5口500円から25口2,500円まで
掛金25口2,500円で最高375万円の共済金

C型火災共済

加入口数最高200口20,000円まで
最高限度額掛金200口20,000円で最高3,000万の共済金
※共済への加入にあたり、組合員となっていただくための出資金が別途必要となります。

共済金のお支払い対象　B型・C型共通
火　災　共　済　金：火災、落雷、爆破・破裂
風水雪害等共済金：風災、水災、雪災、車両飛び込み、航空機墜落

所　在　地　東京都港区虎ノ門２－９－16
日本消防会館６階
連　絡　先　TEL　03-3503-1439
FAX　03-3503-1480
E-Mail:kyousaikai@nissho.or.jp
URL:http://www.nissho.or.jp

消　防　個　人　年　金

消防個人年金は、将来の自分の為の積立年金制度で、(財)日本消防協会が第一生命保険株式会社と締結している拠出型企業年金です。

消防個人年金を紹介します

1 予定利率は**1.25%**です。
2 **月払、半年払、月払と半年払の併用**から払い込み方法をご選択頂き、**掛金1万円**(ゆうちょ銀行は5千円)からご加入頂けます。また、まとまった資金を**一時払**することもできます。
3 年金は、**年4回**で受給して頂けます。
4 **退団・退職後**も**継続**できます。

そのほか詳しくは、ホームページをご覧ください。

R100

お問い合せ先　各市町村の消防事務担当者または消防本部消防団事務担当者、都道府県消防協会
㈶日本消防協会　〒105-0001　東京都港区虎ノ門 2-9-16
TEL.(03)3503-1481（代表）
http://www.nissho.or.jp

毎月一回十日発行
平成二十六年三月十日発行
日本消防
第六十七巻第三号